ENCYCLOPEDIA NIPPONICA 2001

日本大百科全書

ENCYCLOPEDIA
NIPPONICA
2001

1
あ―あん

小学館

ENCYCLOPEDIA
NIPPONICA
2001

日本大百科全書　1

©SHOGAKUKAN　1984
昭和59年11月20日　初版第一刷発行
定価 7,800円

編集著作
出版者　相賀　徹夫

発行所　小　学　館
郵便番号　101
東京都千代田区一ツ橋２－３－１
振替　東京８－200番
電話　編集・東京03－230－5620
業務・東京03－230－5333
販売・東京03－230－5763

印刷所　凸版印刷株式会社

本　文
(特抄百科用紙)　王子製紙株式会社
口　絵
(特抄アート紙)　三菱製紙株式会社
表　紙
(特製クロス)　ダイニック株式会社

製　本　凸版印刷株式会社
若林製本株式会社

＊本書に掲載した日本関係地図は，国土地理院発行の２万５千分の１地形図，５万分の１地形図，20万分の１地勢図を使用したものです。

＊造本には十分注意しておりますが，万一，落丁・乱丁などの不良品がありましたら，おとりかえいたします。
＊本書の内容の一部または全部を，無断で複写複製(コピー)することは，法律で認められた場合を除き，著作者および出版者の権利の侵害となりますので，その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

＊ Printed in Japan ＊

ISBN4-09-526001-7

平仮名〔安〕安安ああ
片仮名〔阿〕阿（偏から）アアアアっ

あ 五十音図第一行第一段の仮名。平仮名の「あ」は「安」の草体から、また、片仮名の「ア」は「阿」の偏から変化してできたものである。万葉仮名では「阿、安、婀、鞍（以上音仮名）、足（訓仮名）」などが使われた。ほかに草仮名としては「ほ（阿）」「ち（愛）」「ゑ（悪）」などがある。

音韻的には、五母音の一つ /a/ にあたる。東京語などでは、奥舌の［a］よりもやや舌が前寄りで、口の開きの大きい中舌広母音である。ア段長音の引き音節部分を、「おかあさん」「おばあさん」などのように表しもする。また表記上はアであっても、音の連なり方によって、「ピアノ→ピヤノ」「バアイ（場合）→バヤイ／バワイ」「オンアイ（恩愛）→オンナイ」などと発音されたりする。

なお「阿吽の仁王」「阿吽の呼吸」などと使われる「阿吽」の「阿」は、悉曇一二母音の初音で、物事の初めの意で用いられ、口を開いた形相や吐息をも表す。〈上野和昭〉

あゝ玉杯に花うけて ああぎょくはいにはなうけて 佐藤紅緑作の少年小説。講談社発行の少年雑誌『少年倶楽部』に一九二七年（昭和二）五月号から翌年四月号まで連載され、大衆児童文学における現代小説の達成を示した。貧しい家に生まれた青木千三少年が、友情に助けられながら向学心を貫き通すという筋に、金持ちの家に育った不良少年阪井巌の純情と悔悟を織り交ぜたもの。美しい友情、立身出世主義、「艱難汝を玉にす」のモラルなど、紅緑の少年少女小説の思想がすべて典型的な形で表されており、当時の少年たちから愛読された。題名は旧制第一高等学校の寮歌による。〈上笙一郎〉

㊐『佐藤紅緑全集 上』（一九六七・講談社）▽加藤謙一著『少年倶楽部時代』（一九八八・講談社）

あゝ野麦峠 ああのむぎとうげ 山本茂美（一九一七―）の記録文学。副題は「ある製糸工女哀史」。一九六八年（昭和四三）朝日新聞社刊。七二年新版刊行。野麦峠は飛騨（岐阜県）と信濃（長野県）との国境にあり、明治中期から昭和初期まで飛騨の貧農の娘は、この峠を越えて岡谷の製糸工場にわずかな前借金で働きに行った。本書は、数百名に及ぶ元工女と関係者からの聞き取りに基づき、工女や「女工哀史」を生み出した農村と工場の実態、さらに原料繭を買いたたき、一一、二歳からの工女を一等から五〇等くらいにランクづけして賃金に差をつけたり、罰金を払わせたりして搾取し、変動の大きい糸相場に対応しようとした資本家の姿を描き出した。それは、生糸輸出、武器輸入という近代日本の基本的な産業構造を象徴する。劇化、映画化され、野麦峠には現在、記念碑が立っている。〈大木基子〉

㊐『あゝ野麦峠』（角川文庫）

噫無情 ああむじょう 黒岩涙香がビクトル・ユゴーの小説『レ・ミゼラブル』を一般読者に理解しやすく翻訳し、『萬朝報』に連載（一九〇二年一〇月八日～〇三年八月二二日）したもの。原作の複雑な箇所を省略し、人名も主人公ジャン・バルジャンを戎互戎と漢字で表すなど、親しみやすい配慮で読書界をわかせた。〈富田 仁〉

I アイ 英語アルファベットの第九字で、第三番目の母音字。［ai］［i］［i:］と発音される。フランス語ではイ、ドイツ語ではイーと発音される。エジプトの象形文字、とくにヒエログリフと関連が深く、エトルリア語やラテン語と直接的な関係がある。小文字 *i* はギリシア語のイオタ *ι* に対応するがドット（小点）は一一世紀になってつけられるようになった。この *i* が頭文字となるとき、中世の筆記体ではこれを上下に突き出た形で書いたため、これから *j* の字が生まれている。大文字Iは、英語では人称代名詞の第一人称単数主格を示し、形而上学では一八世紀からエゴ（自我）を表すのに用いられ論理学では特殊肯定を示す。電気工学では電流を表し、数学では小文字 *i* を虚数単位として使用する。化学では大文字Iをヨウ素の元素記号、小文字 *i* を isomer（異性体）、inactive（不活性）の略号として用いる。〈斎藤公一〉

アイ ⇨アイゴ

アイ 〔藍〕 Chinese indigo／㊥*Polygonum tinctorium* Lour. タデ科の一年草。東南アジア原産。日本には飛鳥時代以前に中国から渡来したとされる。茎の高さは五〇～八〇センチ。夏に、枝先に紅色または白色の小花を穂状につける。種子は長さ二～三ミリ、熟すと黒色、卵形で三稜がある。葉は先のとがった卵形で、全体が赤みを帯びて黒ずんだ緑色。葉から濃青色の染料インジゴをとるために栽培される。インジゴをとる植物にはリュウキュウアイ（キツネノマゴ科）、タイセイ（アブラナ科）、インドアイ（マメ科）など数種あるところから本種をとくにタデアイとよぶこともある。日本には昔から「小上粉」「百貫」「小千本」などの品種が栽培されたが、現在は「小上粉」だけが栽培されている。これには赤花種と白花種があり、赤花種は早生で品質、収量がよく、白花種は晩生で耐病性が強く、葉の品質はもっとも優れている。

アイ
〔上〕タデアイ（白花種）の穂状花序
〔下〕アイ畑での茎葉の刈り取り。刈り取ったアイは株の上で乾燥させる

藍
阿波藍の生産風景を描いた藍絵図
①3月ごろ播種したアイを7月中旬から8月下旬に刈り取る
②収穫したアイの葉は15cmぐらいに刻んで乾燥させ，唐竿でたたき，茎と葉を選別，葉藍をつくる
③寝床とよばれる作業場に葉藍を積み重ね，水をやりながら発酵させ，蒅をつくる
④蒅を搗き固めて藍玉をつくる
徳島　三木文庫

藍の産地として古くから京都、大阪の近郊が知られ、江戸時代中期以降は阿波国（徳島県）が主産地となった。明治時代まではかなり広く栽培されていたが、インドキアイからとったインジゴの輸入や、合成インジゴの開発で栽培は激減した。しかし、色合いや木綿などに染め付けて色もちがよいことなどから現在も高級品用に需要があり、徳島県など一部の地域で栽培が続いている。

漢方では果実・乾葉を解熱、解毒に用い、民間では藍実の煎汁や、新鮮な藍葉をもんだ汁を毒虫の刺傷に外用した。↓藍　〈星川清親〉

藍　あい　青色系統の染色にもっぱら用いられる染料の名。植物性のこの色素の主成分は藍青とインジゴ indigo である。インジゴを含む植物は、主として温熱帯地方に産し、世界の各地に少なくとも五〇種以上はあるといわれ、なかでもインドアイは、もっとも広く分布している。このほかに古くヨーロッパで用いられていたタイセイや、わが国で一般に使用されてきたタデアイ、奄美大島や沖縄のリュウキュウアイなどが知られている。なお青色を出す染料としては、アイのほかに、インジゴを含有しない、かなり多くの植物のあることが知られている。南アメリカの原住民の間で用いられた熱帯アメリカ産のアカネの果実などがそれで、日本ではクサギの実からも薄青い染料が得られるし、古くから摺衣に用いられたというヤマアイにもインジゴは含まれていない。こうした植物は一括して、偽藍 pseudo indigo ともよばれている。

わが国のタデアイは、古くから各地で地アイとして栽培されてきたが、江戸時代に徳島藩がこれを奨励して、阿波藍として良質のものがつくり出され、全国に売りさばかれた。栽培は、二〜三月に播種、四、五月に苗を畑に移植する。七、八月ごろ刈り取り、刻んで、乾燥したアイの葉を九月中旬ごろ小屋に積んで寝かせ、水を打って発酵させる。約三か月たって、一二月ごろにできあがるのが蒅で、これを搗き固めて藍玉とし、または蒅から水分を除いたものが蒅藍として染料に用いられる。藍玉は二〜一〇%のインジゴを含み、溶かして発酵させると、水に溶けないインジゴが水溶性のインドキシルとなり、染色に使用する「藍液」ができる。

沖縄で行われている方法は、刈り取ったリュウキュウアイを枝ごと大きなタンクに入れ、水を加えて放置する。発酵したら枝や葉を取り出してその液を別のタンクに移し入れ、石灰を加えて攪拌する。沈殿するとその上澄みを捨て、底に残ったペースト状の藍を染料として出荷する。この方法は今日インドでも行われており、これを泥藍と称する。↓藍染め　〈山辺知行〉

愛　あい　愛は文学、道徳、哲学、宗教いずれの観点からいっても、もっとも根本的な観念の一つである。とりわけ、キリスト教の文化圏ではこの観念をめぐって思想が展開していった。東洋にも、「仁」とか「慈悲」という思想がある。孔子（孔丘）の「孝悌は仁の根本である」ということばからもわかるように、仁は親子兄弟という血縁に根ざす親愛感に発するもので、この感情を無縁の人にまで広げていくことが仁道である。孟子（孟軻）は「惻隠の心は仁の端なり」（『孟子』公孫丑・第二九）と説き、人を慈しみ、哀れむ同情の心から愛への展開を論じている。墨子（墨翟）は「天下互いに兼愛すべし」（『墨子』兼愛篇）と主張し、親族と他人を区別しない平等の愛を唱えた。仏教でいう「慈」は真実の友情で、「悲」は哀れみ、優しさを意味する。両者はほとんど同じ心情をさしており、中国や日本では、慈悲という合成語で一つの観念として表される。親鸞は仏の広大無辺な慈悲を太陽の光に例え、人間を超えて一木一草に至るまで仏の大慈大悲に浴するものとみなした。作家伊藤整によれば、「他者を自己とまったく同じには愛しえないがゆえに、憐れみの気持ちをもって他者をいたわり、他者に対して本来自己がいだく冷酷さを緩和する」というのが東洋的な知恵のあり方で、この考えから、孔子の「己の欲せざるところを人に施すなかれ」という教えが出てくるのだという。他人を自分と同じに愛することの不可能が自明の前提になっていて、そこから相互に相手を哀れみ、いたわりあう愛が生まれてきたというわけである。キリスト教はこの不可能に挑戦し、「己のごとく汝の隣人を愛すべし」と命じる。イエス・キリストは十字架の死によって、真の愛は自己を犠牲にしなければ達成することができないことを自ら示した。そういう絶対の愛が原型として考えられていたからこそ、常人には不可能と思われる厳しい生き方が命じられたのであろう。↓仁　↓慈悲

ギリシア語では愛は、エロス erōs とアガペー agapē とピリア philia という三つの語によって示される。これらは、愛にとって本質的な三つの位相をそれぞれ指示しているように思われる。エロスは情愛に根ざす情熱的な愛で、哲学者プラトンの『パイドロス』でいわれるように、しばしば狂気の姿をみせ、究極的には一者と合一し、真実在に溶け込むことを求めている。地上において肉体的生存を続けている限り、神的なものとの一体化を実現することはできないから、忘我恍惚を求め続けていけば、エロスは必然的に死と結び付く。エロスの哲学者プラトンが生涯、真実在との出会いを求め続けたあげく、「生より死が望ましい」という一見奇怪な結論に達したのは、その意味では当然の成り行きであった。

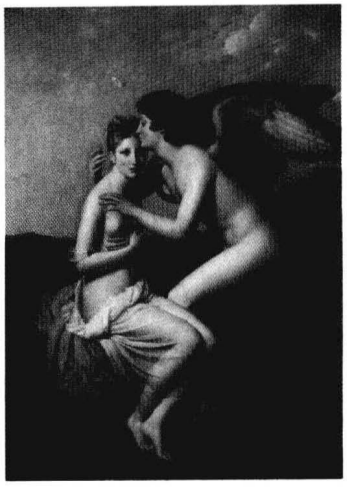
キリスト教的なアガペーの愛は、こういうエロスの愛と根本的に相違する。神と人間との間には、哲学者キルケゴールが「無限の質的差異」と名づけたものが介在する。だから神と人間との融合も、実体的合一もおこりえない。ただあるのは、神と人との交わりである。神と人とは絶対の深淵によって隔てられていながら、どうして交わることができるのであろうか。そこにこそ、イエスの真の存在意義が認められる。イエス・キリストはいわば、神と人間との仲保者であった。神の子イエスがこの地上に人間の肉において生まれたということが、いわば神の愛の唯一の証である。「われわれはイエス・キリストによってのみ神を知る。この仲保者がないならば、神とのあらゆる交わりは断ち切られる」（パンセ）。そういうアガペーの愛にあっては、自我の神に向かう高まりも、熱狂的解体もない。神と人との間の交わりが可能となるためには、二つの主体が向かい合って存在しなければならない。同様に、人と人とが向かい合って存在することによってのみ、隣人としての愛の交わりも可能となるのである。

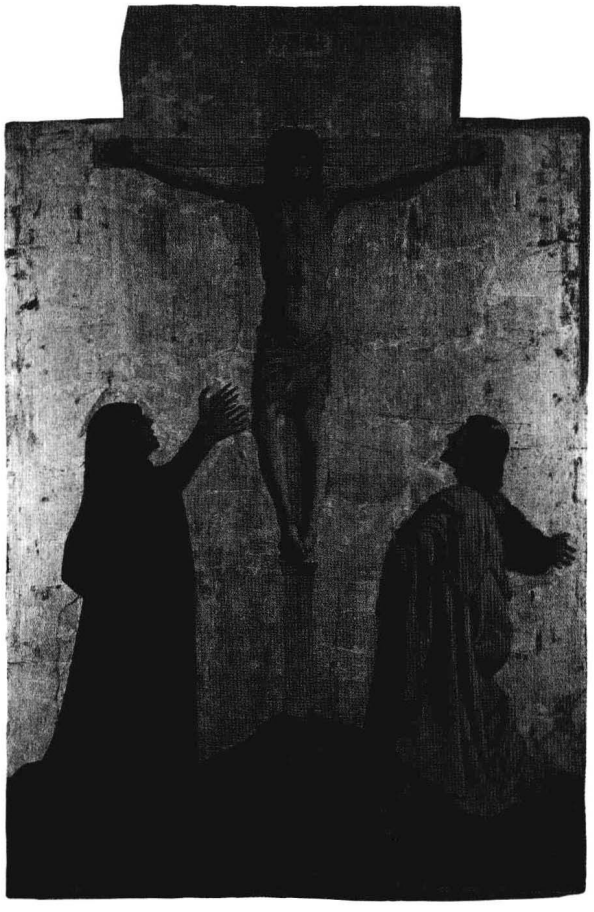
ピリアの愛も、相互に独立な理性的存在者の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

間に成り立つ友愛である。哲学者アリストテレスによれば、人は「自分自身と同じ考えをもち、同じ事柄を望む人」や「自分自身とともに悲しみ、ともに喜ぶ人」を愛するという。つまり、親が子を愛するように、自分自身と等しい者を愛するということで、ピリアの愛は結局、利己愛に帰着する。利己愛に堕さないようにするためには、志を同じくしない者でも、あるいは愚者や悪人をも愛さなければならない。それには、ピリアの愛がアガペーにまで高まる必要があるだろう。だが、神ならぬ身で人類すべてを平等に愛することができるはずがなく、それを実践していると自称すれば、たちまち偽善に陥る。けっして偽善に陥ることのない愛は、自己愛的なエロスのみで、ピリアは、エロス的要素を失う度合いに応じて、虚偽の愛に陥りがちとなる。こうしてピリアの愛は、アガペーとエロスの両極の間を揺れ動くことになる。→アガペー →エロス　〈伊藤勝彦〉

Ⅲプラトン著、藤沢令夫訳『パイドロス』（岩波文庫）▽アリストテレス著、高田三郎訳『ニコマコス倫理学』（岩波文庫）▽伊藤整著『近代日本人の発想の諸形式』（岩波文庫）▽今道友信著『愛について』（講談社現代新書）▽伊藤勝彦著『愛の思想史』（一九八〇・紀伊國屋書店）▽伊藤勝彦著『夢・狂気・愛』（一九七七・新曜社）





愛

〔右〕キリスト教的なアガペーの愛を象徴するピエロ・デラ・フランチェスカ『磔刑』　サンセポルクロ美術館

〔左〕芸術の世界における愛の快楽と美の神エロスは，プシュケ（心，魂）が女性として人格化されると，美しい若者となって彼女に恋の苦しみを与える。またエロスは時代とともに若者から小児へと若返り，弓矢を持って神や人に恋の罰を与えるいたずら神と考えられた。ジェラール『エロスとプシュケ』　パリルーブル美術館

アイアイ aye-aye／㊥*Daubentonia madagascariensis*　哺乳綱霊長目アイアイ科の動物。別名ユビザルともいう原猿で、一科一属一種。マダガスカル島の固有種で、北東部および北西部の多雨林に分布する。頭胴長約四〇センチ、尾長五〇～六〇センチ。短い毛と長い剛毛が混生し、暗褐色ないし黒色で、顔の一部と胸は白っぽい。尾はふさふさとしており、目と耳介は大きい。鼻口部が特異でリスのように突出し、歯式は$\frac{1\cdot0\cdot1\cdot3}{1\cdot0\cdot0\cdot3}$で一八本。門歯は上下とも一対しかないがよく発達し、一生伸び続ける。指は長く、後肢の第一指はやや対向性を示して平づめがあるが、ほかの指にはすべて鉤づめがある。おもに果実と昆虫の幼虫を食べる。前肢の第三指はとくに細長くしなやかで、樹皮下の穴にすむ昆虫の幼虫を探り出すのに役だつ。幼虫をみつけると、門歯で樹皮をはがし、この指を差し入れてかき回す。こうして幼虫をつぶし、繰り返し指につけてすばやく口に運ぶ。ココヤシの果肉も同じようにして食べる。一産一子で、出産期は一〇～一一月。単独生活者で完全な夜行性。高い樹上の木のまたに直径約五〇センチの球形の巣をつくり、昼間はその中で眠る。かつては同島東部と西部の海岸域に広く分布したが、森林伐採などにより激減した。一九六六年から北東部の小島に設けられた特別保護区で、増殖が計画されている。　〈上原重男〉

アイアイ

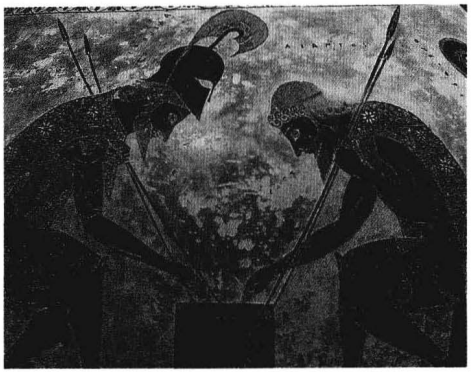
手（右）　第三指が特殊化し，朽ち木の中に穿孔している幼虫などの捕食に役だつ

IIC　アイアイシー　⇨世界放送通信機構

アイアコス Aiakos　ギリシア神話の英雄。ゼウスとアソポス河神の娘アイギナとの子。サラミス王テラモンの父で、その子アイアス（大）は孫にあたる。非常に敬虔な人として知られ、生地アイギナ島の住民が疫病で全滅したとき、ゼウスは彼の信仰心に報いて蟻（ミュルメクス）を人間に変えてその島に住まわせ、彼らをミュルミドン人と名づけた。アイアコスは、干魃のときゼウスに祈って怒りをなだめ、また神々を助けてトロヤの城壁を築いた。スキロンの娘エンデイスと結婚してテラモンとペレウス（アキレウスの父）の二子を、また海のニンフ、プサマテと交わってポコスを得、死後は冥界で死者を裁く者となった。　〈小川正広〉

アイアシ　〔間葦〕㊥*Phacelurus latifolius* (Steud.) Ohwi　イネ科の大形多年草。根茎は太く、横にはい、短い鱗片に覆われる。稈は高さ約一トイ、葉の幅は四センチに及ぶ。葉舌は短く、葉鞘の上端と縁に毛がある。六～一〇月、稈頂に五～一二本に分かれた花序を直立する。花序の枝は三稜形、小穂が対をなしてつく。小穂の一個は無柄、ほかの一個は柄がある。各小穂は二個の小花からなる。和名は、アシに似るがアシではないためだといわれる。日本全土の汽水域の海岸湿地に群生し、朝鮮、中国にも分布する。　〈許　建昌〉

アイアス（大） Aias　ギリシア神話の英雄。サラミス王テラモンの子。ホメロスの『イリアス』ではアキレウスに次ぐ勇将であり、ギリシア軍がアキレウスの不在で危機に瀕したときは、先頭にたってトロヤ勢を撃退し、敵将ヘクトルとも単独で闘って負傷させている。また、英雄パトロクロスの葬送競技では、オデュッセウスと格闘を競い、引き分けとした。彼の名は、父テラモンを訪れたヘラクレスがライオンのように強い子を彼に授けるようにと祈ったところ、ゼウスが鷲（アイエトス）を同意のしるしに送ったことにちなむといわれている。並外れた巨体と豪力の持ち主で、気位が高かった。アキレウスの死後、その武具をめぐってオデュッセウスと争ったが、相手の勝利となると怒り狂い、家畜の群れをギリシア人と信じて殺戮したため、やがてその恥ずべき行為に気づい



アイアス(大)　アキレウス(左)とゲームを楽しむアイアス。B.C.6世紀中ごろ　壺絵　バチカン美術館

て自殺する。彼の死体の血からはヒヤシンスの花が生じたが、その花弁には彼の名の最初の二文字（アイ）がしるされていたと伝えられる。ソフォクレスの悲劇『アイアス』はこの伝説に取材したものである。〈小川正広〉

アイアス(小)　Aiās　ギリシア神話の英雄。オイレウスの子で、トロヤ戦争にはロクリス人を率いてギリシア軍に参加した。小柄で足が速く、つねに大アイアスと比較されるが、大アイアスに比べて歴史上の人物である可能性が強い。しかし性格は傲慢、残忍で、トロヤ陥落のとき、アテネ神殿に逃れたカッサンドラを神像とともにむりやり引きずり出すという暴挙に出たため、怒ったギリシア人は彼を殺そうとした。危うく難を逃れたアイアスは、帰国の途中女神アテネの送った嵐で難破し、一時は海神ポセイドンに救われて暗礁に乗り上げるが、アテネの憎しみにも勝ったと自慢してふたたびアテネの怒りを招き、ポセイドンの三叉の槍で岩を割られて溺死した。その後も女神の怒りは解けず、ロクリスの人々は疫病と飢饉に苦しめられ、神託に従って毎年娘を二人ずつトロヤのアテネ神殿に送らねばならなかった。〈小川正広〉

アイアトン　Henry Ireton　（一六二―五一）イギリス、ピューリタン革命期の独立派指導者。ノッティンガムシャーのピューリタンの家庭に生まれる。内戦の開始と同時に議会軍に参加してオリバー・クロムウェルの信任を得、一六四六年彼の女婿となった。第一次内戦終了後は国王、長老派、レベラーズ（水平派）三者の間にたって、クロムウェルにかわり軍の政治的立場を代弁した。政治的改革案「人民協約」を提出した急進派レベラーズとの間で国制の基本的問題に関して行った四七年の「パトニー討論」Putney Debate はとくに有名である。その後もクロムウェルとともにアイルランド遠征に参加し、五〇年にクロムウェルが帰国した後はその代理を務めるなど活躍したが、翌年に病没した。〈小泉　徹〉

IRA　アイアールエー　アイルランド共和軍 Irish Republican Army の略称。この呼称はすでに一九世紀の急進派フィニアンによって使われているが、広くナショナリスト全体が使い始めたのはイースター蜂起（一九一六）からであり、アイルランド国民議会の樹立（一九一九）以後ナショナリストにとって公式の呼称になった。実体は独立を目ざす義勇軍であった。アイルランド自由国の成立（一九二三）とともに分裂し、自由国→エール→共和国の過程を認めずに武力闘争を続ける勢力がIRAの名称を継いだが、さらに分裂を繰り返し、現在はプロビジョナルとオフィシャルに分かれている。現在北アイルランドで武力闘争を続けている主力は前者である。IRAを共和国軍と訳すことも多いが、アイルランド共和国の正規軍と混同しないことが必要である。↓アイルランド問題　〈堀越　智〉

■堀越智著『アイルランド民族運動の歴史』（一九七九・三省堂）▽松尾太郎著『アイルランド問題の史的構造』（一九八〇・論創社）▽堀越智著『北アイルランド紛争の歴史』（一九八三・論創社）

IRLS　アイアールエルエス interrogation recording and locating system の略称。呼出し記録測位システム。アメリカの実験気象衛星ニンバス三号、四号にのせられた装置の一つ。海洋観測ブイ、陸上自動観測所、船舶、定高度気球などを呼び出し、位置を測定し、観測データを収集、記録する。〈安田敏明〉

IRBM　アイアールビーエム　中距離弾道弾 Intermediate Range Ballistic Missile の略。射程距離二四〇〇～五五〇〇キロ程度のミサイル。↓ミサイル

アイアン・ノブ　Iron Knob　オーストラリア、サウス・オーストラリア州、ワイヤラの北西五〇キロにある鉱山町。人口六九一（一九七六）。近くのアイアン・モナーク Iron Monarch 鉱山など、ミドルバック山地の鉄鉱石（埋蔵量約一億六〇〇〇万トン）の採掘拠点である。鉄鉱石は鉄道でワイヤラに輸送される。一九一一年建設。〈谷内　達〉

IE　アイイー　⇨インダストリアル・エンジニアリング

IEA　アイイーエー　⇨国際エネルギー機関

IEC　アイイーシー　⇨国際電気標準会議

アイウン　Aaioun　アフリカ北部、西サハラ（旧スペイン領サハラ）の首都。エル・アイウン El Aioun ともいう。人口二万〇〇一〇（一九七四）。同国北部モロッコ国境に近い大西洋岸にあるオアシス都市で、カナリア諸島と対している。漁業基地であったが、一九六三年一〇〇キロ内陸のブクラに世界有数の質と埋蔵量をもつ燐鉱石鉱山が開発され、鉱石積出し港となった。ブクラから港まではベルトコンベヤで運搬し、港には一〇万トン級鉱石運搬船が横づけ荷役できる設備をもつ。現在はモロッコの管理下にある。〈藤井宏志〉

藍絵　あいえ　浮世絵版画の用語。藍摺あるいは藍摺絵ともよばれる。幕末に流行したもので、藍一色の濃淡か、藍を画面構成の主色とし、わずかに紅などを用いて摺刷された錦絵のこと。記録によると、一八二九年（文政一二）ごろから版行され始めたとされるが、流行したのはやや遅れて、天保年間（一八三～四四）に入ってからである。この藍絵流行の原因は、当時国外から輸入され始めた顔料ベルリン藍（プルシアン・ブルー）の目新しさによるものと思われ、渓斎英泉、歌川国貞ら、この時期の多くの浮世絵師が用いている。とくに葛飾北斎の『富嶽三十六景』（四六枚揃い）には、多くみいだせる。〈永田生慈〉

IHD　アイエイチディー　⇨国際水文学十年計画

IAAF　アイエーエーエフ　⇨国際陸上競技連盟

IASY　アイエーエスワイ　⇨太陽活動期国際観測年

ISO　アイエスオー　⇨国際標準化機構

ISBN　アイエスビーエヌ　国際標準図書番号 International Standard Book Number の略称。図書および資料に適用され、国際的共通性をもつ固有の番号。一九六七年、イギリスが初めて採用した。日本は、七一年（昭和四六）ならびに七六年に、西ベルリンにある国際標準番号機関から導入の勧告を受けて、八〇年、日本図書コード管理委員会を設置、導入を決めた。ISBNは、国別記号、出版者記号、書名記号、チェック数字の合計一〇桁の数字で構成する。日本の国別記号は4。英語圏は0と1、フランス語圏は2、ドイツ語圏は3、ロシア語圏は5、少数語圏は二桁か三桁である。出版点数の多い出版者は、出版者記号の桁数が少なく、書名記号の桁数が多い。点数の少ない出版者は逆になる。日本では、ISBN記号のほかに、分類コード、価格などを列記した日本図書コードを使用する。管理委員会では、国立国会図書館などと共同して書誌情報の一元化、流通情報の合理化と迅速化のため、出版資料情報センターを構想しているが、言論統制につながると懸念する一部の出版社、図書館が反対、完全実施が難航している。↓出版　〈小林一博〉

INS　アイエヌエス　⇨慣性航法装置

INS　アイエヌエス　⇨高度情報通信システム

IF　アイエフ　⇨国際競技連盟

IFRB　アイエファールビー　⇨国際周波数登録委員会

IFF　アイエフエフ　⇨敵味方識別

IFC　アイエフシー　⇨国際金融公社

IFJ　アイエフジェー　⇨国際ジャーナリスト連盟

IFTA　アイエフティーエー　⇨国際教員団体連盟

IMF　アイエムエフ　⇨国際通貨基金

IMO　アイエムオー　⇨国際海事機関

IMO　アイエムオー　国際気象機関 International Meteorological Organization の略称。世界気象機関（WMO）の前身。気象台長の団体であって政府間機関ではない。一八七九年ローマで設立されたが、実際の発足は一八七三年にウィーンで開かれた第一回国際気象総会と考えられる。同会議は測器の校正、観測時刻、単位、電信による情報交換（モースの電信発明は一八四三年）などを討議した。日本の中央気象台長は一八八五年（明治一八）ごろIMOに加入した。〈安田敏明〉

IMC　アイエムシー　⇨計器気象状態

ILS　アイエルエス instrument landing system の略称で、計器着陸装置のこと。航空機が滑走路に着陸する際、視界が悪く上空から滑走路が見えなくても、正確に進入し安全に着陸できるように地上から指向性電波を発射し、航空機に正しい降下路を指示する装置である。ILSは、地上施設と機上装置から成り立って

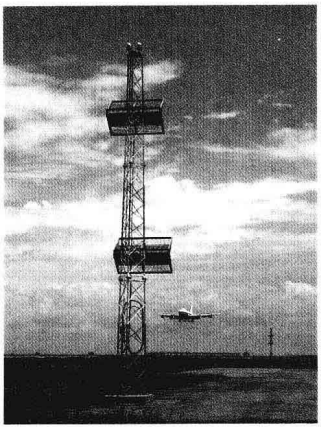
ILS(計器着陸装置)／原理

グライドパス電波
ローカライザー電波
アウターマーカー電波
ローカライザー電波
グライドパス電波
ミドルマーカー電波
空港
滑走路
ミドルマーカー
アウターマーカー
点灯
点灯

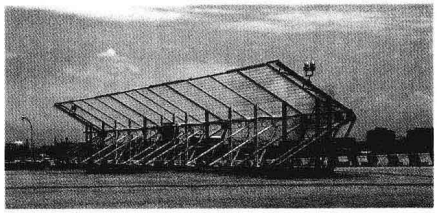
平面図
ローカライザー電波
グライドパス電波
アウターマーカー電波
側面図
ミドルマーカー電波
0.9～1.2km
6.5～11km

右図はＩＬＳで進入中の飛行機の飛行指示器。ローカライザーとグライドパスを示す２本の線の交点が中央にくるように操縦すれば，正しいコースで進入できる。指示器の水平線は飛行機の傾きを示す。

①水平線 ローカライザー 飛行機 グライドパス
進入路より左側 高すぎる
②アウターマーカー通過 やや高すぎる
③進入路より右側 低すぎる
④ミドルマーカー通過 進入路上
⑤接地直前



〔左〕**グライドパスのアンテナ**　着陸地点側方に設置されている。上方のサイドバンドアンテナと下方のキャリアアンテナからなり，グライドパスのコースはこの二つのアンテナから直接空間に放射される電波と一度前面のコンクリート面で反射された電波が合成されてできる。前方の柱はモニター用のアンテナである
〔右〕**ローカライザーのアンテナ**　滑走路末端後方に設置されている



いる。地上施設は、ＩＣＡＯ（国際民間航空機構）で着陸援助施設の国際標準方式として規定され、次の三つの装置から構成されている。

(1)ローカライザー localizer　滑走路の中心線の方向を示す装置で、電波はＶＨＦ帯の電波（一〇八～一一二メガヘルツ）を使用する。進入コースの中心線に対して左右に二・五度ずつの広がりをもって発射され、滑走路に向かって左側は九〇ヘルツ、右側は一五〇ヘルツの変調信号が優勢になるような放射電界をつくり、中心線上にあれば両方の信号が等しく受信できるようになっている。電波の通達距離は一八～三三キロメートルである。

(2)グライドパス glide path, glide slope　滑走路への適切な進入角度を示す装置で、ＵＨＦ帯の電波（三二八・六～三三五・四メガヘルツ）を使用する。水平面に対して二・五～三・〇度の進入角を形成し、進入コースの上側では九〇ヘルツ、下側では一五〇ヘルツの変調信号が優勢となり、コース上では両方の変調度が等しくなるようになっている。電波の通達距離は通常一八キロメートルである。

(3)マーカービーコン marker beacon　ＶＨＦ帯（七五メガヘルツ）の指向性の電波を垂直上方に発射して、この上空を通過した着陸進入中の航空機に、滑走路から特定の距離にある位置に到達したことを知らせる装置である。滑走路からの距離によりアウターマーカー、ミドルマーカー、インナーマーカーの三種類の装置がある。アウターマーカーは四〇〇ヘルツの変調周波数を使用し、滑走路より六・五～一一キロメートルの地点に設置されている。ミドルマーカーは一三〇〇ヘルツの変調周波数を使用し、滑走路より九〇〇～一二〇〇メートルの地点に設置されている。インナーマーカーは三〇〇〇ヘルツの変調周波数を使用し、滑走路から七五～四五〇メートルの地点に設置されている。通常インナーマーカーが設置されることはまれである。そのほか補助として、マーカービーコンのかわりにＤＭＥ（距離測定装置）やＬＦ／ＭＦロケータービーコンが使用されることがある。

一方機上では、受信機で地上からの電波を受信すると、自機の位置が正しい進入コースから上下左右にどれだけずれているかが指示器に表示される。パイロットはこの指示器を見ながらコースから外れないように操縦すれば、正しい降下路に沿って進入することができる。また進入中にマーカーの上空を通過すると、操縦室内のマーカーライトが点灯すると同時に変調音が聞こえ、滑走路までの水平距離を知ることができる。現在では、大形機の多くはＩＬＳとオートパイロット（自動操縦装置）が連結された装置をもっており、電波を受信すればコースに沿って自動的に進入降下を行うことができる。

ＩＬＳによる誘導がどの高度までできるかは、地上施設や機上装置の種類や精度、パイロットの技量などによって異なり、その使用状態の程度により次の三つのカテゴリーに分けられている。カテゴリーⅠは、視程八〇〇メートル以上の場合、高度六〇メートルまで。カテゴリーⅡは、視程四〇〇メートル以上の場合、高度三〇メートルまで。カテゴリーⅢは、地上までＩＬＳにより誘導することができる。地上施設や機上装備が改良された現在では、カテゴリーⅢまでが実用化されている。→空港

〈青木享起〉

ＩＬＯ　アイエルオー　⇨国際労働機関

ＩＬＯ憲章　アイエルオーけんしょう　⇨国際労働憲章

ILO条約 アイエルオーじょうやく ⇨国際労働条約

秋穂（町） あいお（ちょう） 山口県中南部、吉敷郡にある町。一九四〇年（昭和一五）町制施行。周防灘に面した小半島部を占める。『倭名鈔』の益必郷の地、中世には京都長講堂領の荘園で、古くからの農漁村。はげ山の多かった花崗岩丘陵の緑化も進み、山麓一帯にはミカン園が多い。町役場のある秋穂浦は刺網漁業やクルマエビの養殖で知られる。秋穂正八幡宮は中世の古文書や能面を伝え、楼拝殿造の社殿は県指定文化財。人口六〇六〇。〈三浦 肇〉

相生（市） あいおい 兵庫県南西部、播磨灘に臨む工業都市。一九四二年（昭和一七）市制施行。五四年（昭和二九）若狭野、矢野の二村を編入。相生の地名は、一説にもと那波浦字大浦といったが、一二世紀末ごろ大島に城を構えた海老名氏の生国相模にちなみ、相生と改め、大島の大の音をとって「おお」と読ませたという。市域は、南北約一九キロ、東西約七キロと細長く、山地や丘陵が多く、低地は河谷や海岸部にみられるのみである。相生湾は沈水海岸で、湾入が約六キロにも及び、水深六～七トンの天然の良港。東海道・山陽新幹線と山陽本線が通じ、国鉄赤穂線を分岐する。また国道二号、二五〇号が走る。一帯は、古くは秦氏の支配地で久富保といい、一二世紀以降矢野荘となる。近世には赤穂藩に領知され、のちに一部は諸藩に分轄された。一九〇七年（明治四〇）に播磨船渠株式会社が創設されてから、造船の町として繁栄した。現在、石川島播磨重工業（株）を中心に、大小の造船関連工業が立地し、造船関連工業の従業者数は、市の就業者人口の約七〇％を占める。また周辺農村からも多くの労働力を得ている。海岸部は瀬戸内海国立公園に属し、五月のペーロン祭、瓜生の羅漢石仏は珍しい。人口四万一四九八。↓矢野荘 〈富岡儀八〉

■『相生市史』（一九四〇～ ・相生市）

地 五万分の一地形図「播州赤穂」「上郡」

相生（町） あいおい（ちょう） 徳島県中部、那賀郡にある町。一九五六年（昭和三一）相生、延野、日野谷の三村が合併して町制施行。那賀川中流域に位置し、町域の九〇％は山林で、村外地主所有の多い木頭村と異なり町民の所有。一戸当り平均一二ヘクタールを有する。東西に国道一九五号が走る。主産業は林業。特産は河岸段丘上に栽培される相生茶。日野谷、川口の両発電所が立地する。道徳教育の町として地域指定を受けている。人口三九五三。 〈高木秀樹〉

地 五万分の一地形図「桜谷」

アイオイクラゲ 〔相生水母〕 学 *Praya cymbiformis* 腔腸動物門ヒドロ虫綱管クラゲ目アイオイクラゲ科に属する海産動物。二個の同形の泳鐘がその腹側で相対しており、そのため「相生」の名がある。二個の泳鐘は多少大きさに差があるが、その中間から多数の幹群をもった幹が長く伸びている。各幹群は栄養体、触手、数個の生殖体などからなり、それらは一個の保護葉で覆われている。泳鐘は長さ三～四チセン、幅二～三チセン、幹は長く伸びると三トン以上に達することがある。本州中部以南の外洋のほか、世界の温暖域に広く分布する。〈山田真弓〉

相生橋 あいおいばし 広島市の中心太田川（本川）と元安川の分岐点に架かる三叉橋。かつて二河川の分岐点に、木橋が架けられていたため、この名称がつけられた。のち近代的な橋に付けかえられ市電が走った。一九四五年（昭和二〇）八月六日の原爆投下はこの橋を目標に行われ、橋は破壊され、川面には多くの死者が流れた。その後新橋に架けかえられ、平和公園はこの南にある。 〈北川建次〉

地 五万分の一地形図「広島」

靉嘔 あいおう （一九三一― ） 洋画家。茨城県行方郡玉造町に生まれる。本名飯島孝雄。一九五四年（昭和二九）東京教育大学芸術学科を卒業。在学中からデモクラート美術家協会展に出品、のち池田満寿夫らとグループ「実在者」を結成する。五八年からニューヨークに住み、フルクサス・グループに参加、六六年ベネチア・ビエンナーレ展に出品する。七〇年の東京国際版画ビエンナーレ展で東京国立近代美術館賞を受けたほか、海外での受賞も多い。虹の彩調の絵画と版画で知られ、日本と欧米で多数の個展を開く。七〇年以降は東京とニューヨークに住む。 〈小倉忠夫〉

IOC アイオーシー ⇨国際オリンピック委員会

IOJ アイオージェー ⇨国際ジャーナリスト機構

IOCU アイオーシーユー ⇨国際消費者機構

I／O表 アイオーひょう ⇨産業連関表

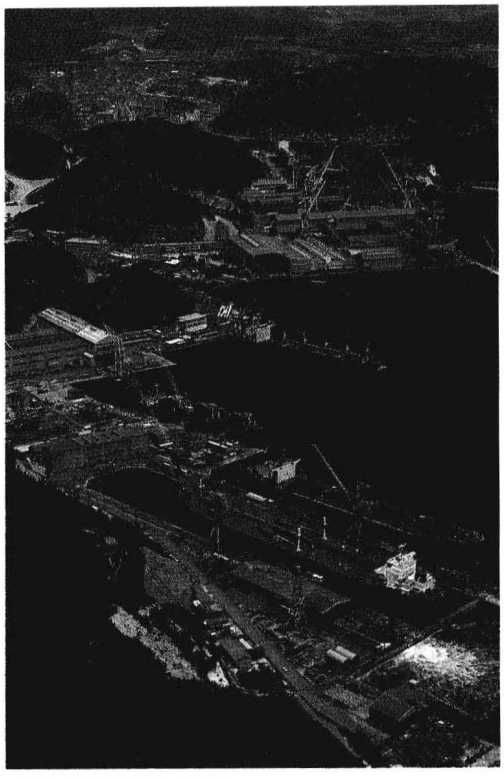
アイオリス Aiolis 古代にアイオリス方言のギリシア人が移住した小アジア北西部の地域。現在はトルコ領。南はスミルナを含んだが、スミルナがイオニア領となってからは、ヘルモス川から北はケブレネーまでの地域を含んだ。紀元前七世紀ごろにはトロアス地方にまで広がった。狭義にはギリシアのサモス島の対岸地域、キメーなどの一二ポリス（都市国家）の領域をさす。一二ポリスの祭祀の中心はグリネイオンのアポロン神殿であった。ヘロドトスは、この地は肥沃だと伝えている。〈古山正人〉

アイオリス人 ―じん Aioleis ギリシア 古代ギリシアのアイオリス方言を話す人々。紀元前二〇〇〇年紀代に、テッサリアやボイオティアからサモスを経てアイオリス地方（ヘレスポントス海峡からヘルモス河口に及ぶ地域）へ移住した。キメーを中心とする一二のポリスをつくったが、彼らは現地の異民族とかなりの融合を遂げたと思われる。フリギアと交易を行ったが、主として農業を営んだ。一時期を除いてペルシアの勢力下にあり、ヘレニズム期はセレウコス朝やペルガモンの支配を受けた。ローマ時代には内陸地方の発展でアイオリス諸市は重要性を失った。 〈古山正人〉

アイオロス Aiolos ギリシア神話の風の神。ヒッポテスまたは海神ポセイドンの子。アイオリア島に住み、風を洞穴または革袋の中に閉じ込めている。オデュッセウスが帰国の途中にこの島へ漂着したとき、風神は英雄を親切に迎え、出発の際には故郷のイタカ島への順風以外のすべての風を閉じ込めた革袋を贈った。しかし、オデュッセウスが寝ている間に仲間たちが中身を酒と誤ってあけたため、あらゆる風が吹き出てすさまじい嵐がおこり、船はふたたびアイオリア島に打ち戻された。オデュッセウスはまたもや順風を求めてきたが、風神は神々の怒りを恐れて援助を断った。またアイオロスは、ギリシア人の祖ヘレンとニンフのオルセイスの子、およびポセイドンとアルネ（またはメラニッペ）の子（ともにアイオリス人の祖先）と同一視されている。 〈小川正広〉

アイオワ Iowa アメリカ合衆国、中北部の農業州。面積一四万五七九〇平方キロ、人口二九一万三三八七（一九八〇）。州都はデ・モイン。東をミシシッピ川、西をミズーリ川にくぎられ、北はミネソタ州、南はミズーリ州に接する。中央低地の一部である大平原地帯に位置し、北西から南東方向に緩やかな傾斜をみせる。中北部を中心に、アメリカのコーンベルトの心臓部を形成する肥沃な土地は、更新世（洪積世）の大陸氷河や氷床の産物である。気候も農業に最適な湿潤大陸性気候である。

第二次世界大戦後は工業も発展し、州の経済は農業、工業の両方に依存しているが、農業収入はなお高く、カリフォルニア州に次ぐ。中北部を中心に生産されるトウモロコシの産高は全米第一位、干し草と大豆は第二位、オート麦は第三位である。ウシ、ブタ、ヒツジは南西部を中心に飼育され、畜産収入は全米第一位である。以上をみても、農業州として健在であることがわかる。発展を続ける工業は、食品加工、



相生市 市の繁栄は造船界の好・不況に左右される。相生湾西岸の石川島播磨重工業の造船所と，湾奥に発達した市街

農業機械、肥料、電子機器などが中心である。鉱業では、規模は小さいが、砂礫や石灰岩などを多く産し、セメント工業が重要な地位を占めている。交通の面では、鉄道網がよく発達するうえ、ハイウェーも完備している。また、ミズーリ川およびミシシッピ川の沿岸には、ダベンポート、クリントン、ダビュークなどの河港都市が発達し、水運の中心となっている。

有史前より農耕を主とするインディアンが居住していたが、一六七三年、フランスの探検隊が、白人としては初めてこの地に入り、交易所が次々とつくられた。一八〇三年のルイジアナ購入によって合衆国に譲渡され、三八年に準州となり、四六年に二九番目の州に昇格した。五〇年代の鉄道の開通が発展をもたらし、一九世紀末からは合衆国内でも主要な農業州となった。住民の九七％が白人、一・四％が黒人で、白人はスカンジナビア系、イギリス系、オランダ系が多い。「バランス」を州のモットーとして、各民族が住みよい地域社会を構成しており、人口はほぼ州の全域にわたって均等に分布する。教育が盛んな州で、州立大学、アイオワ大学をはじめ、六二の大学がある。〈作野和世〉

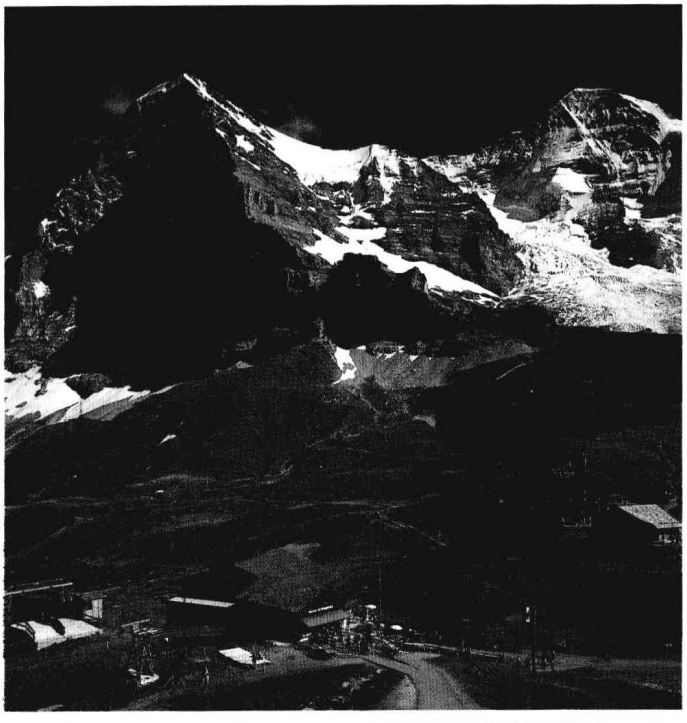
アイオワ・シティ Iowa City アメリカ合衆国、アイオワ州東部の都市。人口五万〇五〇八（一九八〇）。アイオワ川に臨む、肥沃な農業地帯の交易地。クッションなどに用いるフォームラバー、食品、化粧品、歯みがき粉などの製造業が盛んである。一八三九年から五七年までアイオワ準州の州都になったことがある。一八五五年に鉄道が開通し、西部地域への物資の重要な供給地として、町は大きく発展した。また、アイオワ大学（一八五五創設）の所在地で、同大学を中心にした医療や研究の中心地ともなっている。〈作野和世〉

アイオン台風 ――たいふう 一九四八年（昭和二三）九月一五～一七日に関東、甲信および東北地方に風水害をもたらした台風。強い勢力を保ったまま東海道沖を北東進し、伊豆半島南端をかすめて一七日〇時過ぎ房総半島に上陸し、その後鹿島灘から三陸沖へ進んだ。速度が速かったため、台風の強さのわりには河川の増水は少なかった。東北地方では、一関の山津波、宮古の洪水などで被害が著しく、また全国でも死者・行方不明八三八人であった。アイオン Ione の名称の由来は、第二次世界大戦後に連合軍気象隊が台風の発生順序に従ってABC……の頭文字をもつ女性名を順次つけていったことによる。〈饒村曜〉

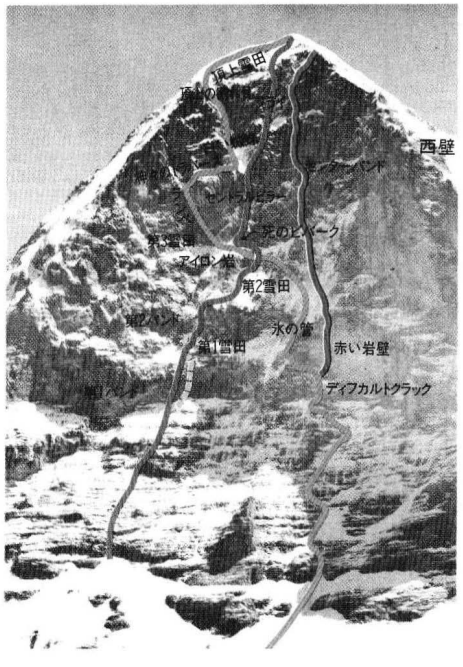
哀歌 あいか Lamentation 『旧約聖書』の一書。ギリシア語に訳されたときから、本書は「エレミヤの哀歌」とよばれ、預言者エレミヤの作とされてきたが、本来は五つの嘆きの歌を集めたもので、彼の作ではない。歌はいずれも、紀元前五八七年のエルサレム陥落とユダ王国の滅亡を歌ったものである。第二の歌（二章）と第四の歌（四章）は描写も具体的で、王国滅亡直後に書かれたものであろう。第三の歌（三章）だけは一人称単数で、王のような指導者が自ら詠んだ形式をとっている。また第五の歌（五章）以外は、それぞれ「いろは歌」の形式になっている。本書は苦痛に満ちた民族の受難を語り、救いを求める神への祈りを記し、亡国後のユダヤ人の気持ちを示す貴重な文献である。〈木田献一〉

アイガー山 ――さん Eiger スイス中部、アルプスのベルナー・オーバーラントにある高峰。標高三九七〇㍍。ユングフラウ、メンヒとともにユングフラウ山群を形成する。インターラーケンから鉄道でクライネシャイデックに達すると、すぐ近くに見える。南にアイガー氷河を巡らし、北は一八〇〇㍍の高度差をもつ石灰岩の岩壁となってグリンデルワルトの谷に臨んでいる。登山史上しばしば登場する名峰で、初登頂は一八五八年、イギリス人チャールス・バリントンによって達成され、冬季初登頂は一八九〇年、イギリス人M・M・ミード、ウッドラフによって行われた。一九二四年にはイギリス人アーノルド・ランらによってスキーによる初登頂がなされた。一九二一年には槇有恒が東山稜の初登攀を行い、日本人の登山技術が世界に知られ、これを契機としてヨーロッパの登山技術が日本に伝えられた。アイガー北壁は、マッターホルン、グランド・ジョラスとともにアルプス三大北壁として登攀の困難なことで知られ、アルピニストの挑戦の対象となった。北壁は、一九三八年、ドイツ人A・ヘックマイヤー、オーストリア人ハインリヒ・ハラーらによって初登攀され、冬季は一九六〇年、同国のトニー・ヒーベラーらによって初登攀された。多くの日本人もこの北壁に挑み、女性では一九六九年に今井通子が登攀している。〈徳久球雄〉

▣ハインリヒ・ハラー著、横川文雄訳『白いクモ』（一九六六・二見書房）▽槇有恒著『山行』（旺文社文庫）▽A・ヘックマイヤー著、安川茂雄訳『アルプス三つの壁』（一九六六・二見書房）



アイガー山
クライネシャイデック付近から眺めた北壁（左側）と南西面。右端はメンヒ



合方 あいかた 邦楽用語。唄と唄との間をつなぐ間奏のうち、短い「合の手」に対し、ある主題をもって構成される相当の長さのものをいう。唄い手に休息を与えるとともに、歌詞の内容や気分を強調し、三味線の聞かせ所としてつくられるもの。固有名詞でよばれるものに『晒女』、『越後獅子』などの「晒しの合方」、『蜘蛛拍子舞』、『小鍛冶』の「鍛冶拍子の合方」、『吾妻八景』の「佃の合方」などがあり、別に寒さや雪を表す「雪の合方」、波の音や千鳥の声を表現した「千鳥の曲」などがある。唄のある曲でも、唄を廃して三味線だけを奏するときに合方とよぶ。歌舞伎の下座音楽では、情景や心理描写をかもし出す伴奏に使われる曲のうち、唄のないものを合方といい、これにしばしば鳴り物を配して雰囲気を強調し効果をあげる。また能楽では、謡曲の拍子にあわせてはやす器楽、すなわち小鼓、大鼓、太鼓の奏技を合方とよぶ。〈松井俊諭〉

アイ・カメラ eye camera 被験者の角膜に光を投射し、眼球運動を反射光の動きでとらえる装置。一九〇一年ごろから医学あるいは

アイカメラ

①運転者の注視点を映画フィルムやビデオテープに記録し分析する

②～⑤注視点は画面の中に白いスポットマークとなって表れる（写真の赤丸はマークの位置を示したもの）

心理学の分野で考案され、一九五〇～六〇年ごろにはかなり具体化して、今日のアイ・カメラの原型とみられるものが登場した。アメリカで初めて印刷広告のコピーテスト用として使用されたのは一九三八年八月の『ルック』誌掲載の広告に対してであったが、広告作品上の注視点の動きや注視時間を記録して、広告の構成要素の注目度を測定する実験的手法として注目されるようになったのは六二年ごろといわれる。アメリカのアイ・カメラの利用は、広告、ディスプレー、店舗レイアウト、パッケージ・デザインなどの調査研究だけでなく、オートメーション・コントロール用の計器パネルの設計といった点にまで広く利用された。人間工学的な応用を主とするアメリカに対し、日本では広告媒体の調査、分析や運転者と歩行者の交差点における注視点の研究、分析などに重要なデータを提供できるとの理由から、一九六六年（昭和四一）ごろから実用化されるようになった。アイ・カメラで得られたデータは量的に表すことができないので解釈がむずかしく、また広告の印象が好ましかったかどうかを判別できない点があるので、この結果だけから広告の全体的効果を推論することは危険である。

なお、実験心理学分野ではオフサルモグラフ ophthalmograph とよばれ、医学分野では電気眼球図記録 electrooculography とよばれて、それぞれ微細な眼球の動きをとらえるのに利用されている。〈島守光雄〉

アイガモ〔合鴨・間鴨〕call duck／㊥*Anas platyrhyncha* var. *domestica* 鳥綱カモ目カモ科の鳥。アヒルの一品種で、よく鳴くためナキアヒルともいわれ、カモ猟のおとりとして使われることもある。地方名をつけて紀州ナキ、仙台ナキあるいは北九州の四季アヒルなどとよばれる。体形はマガモとほぼ同じであるが、アオクビ種と交雑されたこともあるので、大形化し羽色の純度が失われているものもある。肉質もマガモに近く、鴨料理に用いられる。相鴨という名称は、肉用アヒルを示す業者の用語である。また、地方によってマガモの長期飼育したものをアイガモということがある。

↓アヒル〈西田隆雄〉

合川（町）あいかわ（まち）秋田県北部、北秋田郡にある町。一九五五年（昭和三〇）上大野、下大野、落合、下小阿仁の四村が合併して成立。阿仁川と小阿仁川の清流が町の中央部で合流し、町名もそれにちなむ。国鉄阿仁合線が通じる。中世は安東氏領、近世は佐竹氏の支配下にあった。気候は夏は涼しいが、冬は寒さが厳しく積雪も多い。米作農業を主とし、最近大野台の開発のために大型機械の導入を図り、酪農の振興にも力を入れている。また造林一〇〇〇ヘクタール運動や、カントリーエレベーター導入による稲作の協業化も図られている。人口九五八七。〈宮崎禮次郎〉

㊀『合川町誌』（一九六五・合川町）

㊁五万分の一地形図「米内沢」

相川（町）あいかわ（まち）新潟県佐渡郡にある町。佐渡島の大佐渡山地西半を占め、細長い町域をもつ。一八八九年（明治二二）町制施行。一九五四年（昭和二九）金泉村、二見村、五六年高千村、外海府村と合併。全域が佐渡弥彦米山国定公園に含まれ、島嶼や海岸段丘による自然美に恵まれ、佐渡金山史跡とともに、佐渡観光の中心をなす。両津港からバスで約一時間。

相川はもと日本海に面するわびしい小漁村であったが、一六〇一年（慶長六）佐渡金山が開かれ、〇三年大久保長安を佐渡奉行に任じ、諸国の鉱山技術者を集め、鉱坑の開発を進めてから急激に発展し、以来、江戸幕府の金蔵として重きをなし、慶長・元和・寛永年間（一五九六～一六四四）には「昼千貫、夜千貫」と称せられる全盛を極め、町の人口も一〇万余を数えたといわれる。幕末ごろから産額もしだいに減り、町もさびれた。現在は、金山よりむしろ佐渡の行政・観光の中心地として知られる。

観光地としては、佐渡金山遺跡にまつわる道遊の割戸、南沢疏水坑、佐渡奉行所跡、国指定史跡の宗太夫坑を公開する「ゴールデン佐渡」などがある。海岸景勝地には、中心をなす尖閣湾、相川海中公園、七浦海岸、平根崎波食甌穴群、春日岬、大佐渡スカイラインなどがあり、佐渡観光客のほとんどはこの町に宿泊する。名産品には無名異焼、海産物（スルメイカなど）、鉱山銘石がある。年中行事は、七月下旬の鉱山祭がとくに有名で、全国おけさ流しコンクールも行われる。また、一〇月中旬の相川祭も相川の秋祭りとして広く知られる。このほか、鉱山資料を豊富にそろえた相川郷土博物館や、佐渡おけさ、相川音頭、春駒を公開する佐渡会館もある。人口一万二七二一。〈山崎久雄〉

㊀『佐渡相川の歴史　資料集1』（一九七一・相川町）▽麓三郎著『佐渡金銀山史話』（一九七三・三菱金属鉱業）

㊁五万分の一地形図「相川」「鷲崎」「河原田」

愛川（町）あいかわ（まち）神奈川県中北部、愛甲郡にある町。一九四〇年（昭和一五）町制施行。五五年（昭和三〇）高峰村と合併、五六年中津村を編入。小田急電鉄本厚木駅、国鉄相模線上溝駅などからバスが通じる。古来、相模川流域の相模平野から、また中世には、鎌倉、小田原から甲州（山梨県）東部へ通じる交通の要地で、北東の三増は中世からの宿場として知られ、諏訪神社の獅子舞は、日本における一人立ち三頭獅子舞の南限を示すもので、県指定無形民俗文化財。また南の中津川の西にある八菅山は、中・近世には伊勢原の大山（石尊権現）、日向山（日向薬師）と並ぶ山岳修験（聖護院流）の道場（別当光勝寺）のあった所で、参道には「丁石」が残される。江戸時代後期からは、北西の半原を中心として絹撚糸業が盛んとなり、いまも撚糸、縫い糸の特産で知られ、全国で使われるミシン糸の九〇％をここで占める。糸とり唄の「管巻唄」がよく歌われる。南東の厚木市にまたがる中津工業団地は、第二次世界大戦中につくられた軍用飛行場跡を利用したもので、金属製品、機械などの近代工業が集まり、付近は住宅地化が目だつ。八菅山、三増峠のほか、西部の仏果山、経ヶ岳など町を巡る山稜はナラ、クヌギ、アカマツなどの自然林に覆われ、稜線は展望が開け、よいハイキングコースである。また、中津川上流の中津渓谷は峡谷美で知られ、釣りやキャンプの好適地でもある。人口二万九八七一。〈浅香幸雄〉

㊁五万分の一地形図「八王子」

相川音頭あいかわおんど新潟県佐渡郡相川町を中心に歌われてきた民謡。江戸時代の寛文末期（一六七〇ころ）におこった盆踊り唄で、初めは『謡曲百番くずし』といい、謡曲の曲名を懸詞にしたり、『おさん仙次郎心中濃茶染』のように、心中物や恋物語をテーマにして歌い込んだりしていた。約一四〇年のちの文政・天保年間（一八二八～四四）になると、尚武の世相の影響で勇ましい歌詞が喜ばれるようになり、現在歌われている源平合戦を描写した五段の口説調となった。初段「宇治川先陣」、二段「巴の勇戦」、三段「那須与市扇の的」、四段「継信の死」、そして五段の途中からがよく歌われている「どっと笑うて立つ浪風の　荒き折節義経公は……」のくだりの「義経弓流し」である。相川金山に江戸幕府の奉行所が置かれたころ、毎年七月一五日の盆に、その奉行所の前でこの『相川音頭』が踊られたことから「御前踊り」とよばれるようになった。『佐渡おけさ』とともに佐渡の代表的な唄である。〈斎藤　明〉

相川鉱山あいかわこうざん新潟県佐渡郡の相川町にある鉱山。現在は佐渡鉱山とよばれ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

る。古来、佐渡金山とよばれた。江戸時代、幕府が直轄したもっとも重要な金鉱。→佐渡金山

鮎川義介　あいかわよしすけ　（一八八〇―一九六七）新興財閥日産コンツェルンの創設者、政治家。山口県生まれ。東京帝国大学機械工学科卒業後、一職工として芝浦製作所に入社、さらにアメリカに渡って可鍛鋳鉄の製造技術を学ぶ。一九一〇年（明治四三）戸畑鋳物、二二年（大正一一）共立企業を設立、その経営手腕を認められる。大正末年危機に陥った義弟久原房之助の事業経営を引き受け、二八年（昭和三）久原鉱業を公開持株会社日本産業に改組した。満州事変以後の景気回復過程のなかで拡大戦略を展開し、日本鉱業、日立製作所、日本水産、日産自動車などの有力会社を擁する新興財閥日産コンツェルンを形成した。三七年その本社日本産業を「満州国」に移駐して満州重工業開発とし、日「満」両国にまたがる一大コンツェルンの形成を図ったが、戦時体制の強化、戦局の悪化とともにその計画は挫折した。第二次世界大戦後は、公職追放解除後おもに政治活動に専念し、参議院議員になり、五六年（昭和三一）には日本中小企業政治連盟を結成、その総裁に就任した。〈宇田川勝〉

鮎川義介

㊀小島直記著『鮎川義介伝』（一九六七・日本経営出版会）

愛玩動物　あいがんどうぶつ　さえずりを聞いたり、美しい色彩や姿を観賞したり、かわいいしぐさを楽しんだりするなど、人の生活に潤いを与えるために飼育される動物のことで、英語ではペット pet という。昔からイヌ、ネコ、小鳥、キンギョ、ニシキゴイなどがもてはやされてきた。しかし最近はこれら従来の小動物に飽き足りず、なお珍奇なものを求めようとする風潮が高まり、ペットショップにはアライグマ、ハナグマなどの野生動物も姿をみせるようになっている。範囲も著しく広がり、前出のもののほかにシマリス、ハムスター、ミドリガメをはじめとする爬虫類、アメリカザリガニやカブトムシその他の節足動物も人気がある。もともと特定の種を定められるものではなく、好みによりすべての動物がなりうるが、そこにはおのずと、個人の家庭での飼育に適するものと不向きのものがある。動物を飼育するからには、飼い主にはそれを十分に管理し、他人に迷惑を及ぼさぬようにする責任が生ずるものであるから、大声で鳴き騒がしいものや、著しく不快臭のするもの、猛獣、毒ヘビのように飼い主だけでなく他人に対しても多大の危険性を有するものは、愛玩動物としては適さない。また最近のように野生鳥獣の生息数が著しく減じてきているおりでは、みだりに野生動物をとらえて個人飼育するのは好ましいことではなく、飼育下で継代繁殖可能なものだけにとどめるようにしたい。なお、総理府では「動物の保護及び管理に関する法律」を一九七四年（昭和四九）四月一日より、「展示動物等の飼養及び保管に関する基準」を七六年二月一〇日より、それぞれ施行させた。〈増井光子〉

愛輝　あいき／アイホイ　中国、黒竜江省北部、黒竜江右岸の旧県。内モンゴル自治区に隣接する。一九〇八年アイグン（愛琿）直隷庁、一三年アイグン県、五六年県となり、八三年黒河市に編入した。北緯五五度あたりであるが、七月の平均気温が二二度Cのため、春小麦、大豆のほか沖積平野には水稲が栽培され、水稲は世界の北限をなす。山地には針葉樹、広葉樹が豊富で黒河では製材、木工が盛ん。三つの炭鉱のほか金、鉛、鉄、重晶石、油母頁岩などの鉱山もある。鉄道は「満州国」時代に北安、嫩江に通じていたが、第二次世界大戦終了前に撤去された。道路はあるが未舗装である。黒竜江の水運は年間一七〇～二〇〇日可能で、黒河から上下流に通じている。→黒河　〈浅井辰郎〉

合着　あいぎ　⇨合服

間着　あいぎ　重ねた衣服の間に着る衣服の意で、江戸時代には武家の女性が打掛の下に着用した小袖のことをいう。布地は正式には綸子、色は黄、白、赤の無地、これを間黄、間白、間赤といった。間黄は正月七日、間白は三月三日から三〇日まで、間赤は一〇月から一二月の間に用いたといわれる。これは正式の場合であって、普通の場合には、絞りや刺しゅうで模様を表したものも用いられた。また身分によって縮緬、紗綾などが用いられた。間着の下には、一般に白羽二重の下着を重ねて着用する。今日では間着は掛下とよばれ、打掛とともに花嫁衣装に用いられているだけである。

ほかに、季節と季節との間、すなわち春と夏との間（五月）、夏と秋との間（九月）に着る衣服を合着といい、合服と同義に使うことが多い。〈藤本やす〉

合気道　あいきどう　日本武道で格闘技の一種。

〔歴史〕もとは古流柔術の一つ大東流柔術の流れをくむ。伝書によれば、源義光を始祖とし、甲斐（山梨県）の武田家から会津（福島県）の武田家へ伝わったもので、明治・大正のころ会津の武田惣角により継承され、昭和に入って、その高弟である植芝盛平が柳生流や起倒流柔術などの長所も加えて従来の技を統合し、合気武道として大東流から独立、一九四四年（昭和一九）には合気道と改称した。組織としては四〇年財団法人皇武会を設立、四八年に財団法人日本合気会として改組、各地に支部や大学クラブが設けられた。五五年ころから海外にも指導者が派遣され、国際合気道連盟設立（一九五〇）とともに近年では世界各国に道場が増えている。

〔技〕徒手をたてまえとしながら、刀、槍、棒による攻撃にも備える多様性のある護身武術である。技の特色は、殺傷を目的とせず、相手の手首、腕の関節の弱点を利用し、倒す、投げる、押さえることにある。その技は多角的で非常に多い。練習法には、約束による形の反復があり、これは力の統一性を養うとともに人間的精神の高揚を求める。関節技の練習は身体の柔軟性を養い、老人や女子も無理なく続けられるので、健康法としても適している。〈石井恒男〉

㊀植芝吉祥丸著『合気道』（一九六三・講談社）

アイギナ Aigina　古代ギリシアのドリス人のポリス（都市国家）。アテネの南、サロニカ湾に同名（現代ギリシア語でアイーナ Aiyina）の小島と町があり、遺跡が残る。紀元前七世紀後半にギリシア本土で最初の貨幣を発行し、前六世紀の中ごろにはエジプトのナウクラティスに貿易拠点を設け、商業ポリスとして発展した。ペルシア戦争の際にはヘラス連合の一員として戦ったが、前六世紀以来アテネとの間にしばしば紛争を生じ、おそらく前四五七／六年ついに屈服してデロス同盟に加盟させられた。ペロポネソス戦争の勃発した前四三一年に住民はアテネの手で島から追放されたが、前四〇五年スパルタの力で復帰した。前四世紀以後次々に周辺の国々や同盟の支配を受け、前一三三年以降ペルガモン領からローマ領になった。→アイーナ島　〈清永昭次〉

IQ　アイキュー　⇨知能指数

相給　あいきゅう　江戸時代の知行形態。分給、分郷、相知、入会知行ともいう。一円所領、一円知行に対するもので、一村が複数の領主に分割支配された知行またはその土地をいう。領主の数で二給とか三給、四給とよんだ。徳川氏は一五九〇年（天正一八）関東入国当初から旗本への所領宛行は相給を原則とし、下野国（栃木県）には幕領、藩領、旗本領で一村が二〇給という村もある。また、諸藩家臣の知行地や公家領も相給知行が原則で、岡山藩領備

正面打ち座技第一教

横面打ち四方投げ

合気道　呼吸投げ

前国（岡山県）尾張村には二六給、公家領山城国（京都府）吉祥院村は六四給に分割されている。〈神崎彰利〉

▽『神奈川県史　通史編2　近世1』（一九八一・神奈川県）

IQ制　アイキューせい　⇨輸入割当制

間狂言　あいきょうげん　能のなかで狂言方が担当する部分。その役をアイという。「語リ間」「アシライ間」「劇間」に大別できる。語リ間のうちもっとも多いのが、シテの中入りの間に所の者などとして出、ワキの要請に応じ座って一曲の主題や関連する話題を語る「居語リ」である。これに対し末社の神などが立ったまま社寺の縁起などを語るのを「立語リ」といい、変事の急を告げる「早打チ間」やアイの語りによって能が始まる「口開ケ間」も立語リに含まれる。アシライ間はシテやワキなどと演技的交渉の深いものである。劇間は複数のアイが出て、能の他の役とはかかわりをもたず、アイ同士が能のなかで演ずる寸劇をいう。また常と異なる特殊演出は「替間」とよぶ。アイはほとんどが所の者、太刀持、能力、末社の神など身分の低い役であるが、能の一役として曲の雰囲気を左右するので軽視できない。なお、能の現行曲約二四〇番のうち四〇番ほどの曲には間狂言がない。〈小林　責〉

愛郷塾　あいきょうじゅく　農本主義者橘孝三郎が茨城県茨城郡常盤村に創設した私塾。一九一五年（大正四）第一高等学校を中退した橘は、長兄鉄太郎や次兄徳次郎らと「兄弟村農場」を経営していたが、二九年（昭和四）一一月、「大地主義」「兄弟主義」「勤労主義」を掲げて愛郷会を結成し、中堅自作、自小作農家の青年たちを主体に農民の啓蒙活動や協同組合運動などを行った。さらに三一年「新日本建設の闘士」を養成するため自営的勤労学校の設立を企図し、同年四月一五日愛郷塾を開設した。しかし、橘はこのころから井上日召らを通じて直接行動による国家改造運動に関心を抱き始め、海軍士官らによるクーデター計画に参画する。そして、五・一五事件には塾生数名が「農民決死隊」を組織して東京市内の変電所襲撃を担当した。これによって塾の名は一躍有名になったが塾勢は逆に衰退し、加えて三三年一月の塾生による請願令違反事件（橘釈放要求直訴未遂）による弾圧で塾の活動はまったく停止した。→五・一五事件　→橘孝三郎　〈安部博純〉

▽松沢哲成著『橘孝三郎――日本ファシズム原始回帰派』（一九七二・三一書房）　▽保阪正康著『五・一五事件――橘孝三郎と愛郷塾の軌跡』（一九七四・草思社）

阿育王　あいくおう　⇨アショカ（王）

合口　あいくち　刀剣の拵（外装）形式の一つ。鐔を用いず、柄の口と鞘の口とが直接あうものをいう。短刀の拵のもっとも一般的な形式として、平安時代から江戸時代まで盛行しているが、室町時代末期には上杉景勝の愛刀の高木長光や山鳥文一文字など、まれに打刀の拵の作例も現存している。なお、現在、新聞・警察用語で短刀そのものを合口（匕首）と称することがあるが、これは短刀の拵にこの形式が多かったことから転じた俗称であり、本来は刀身ではなく、拵をさす名称である。〈原田一敏〉

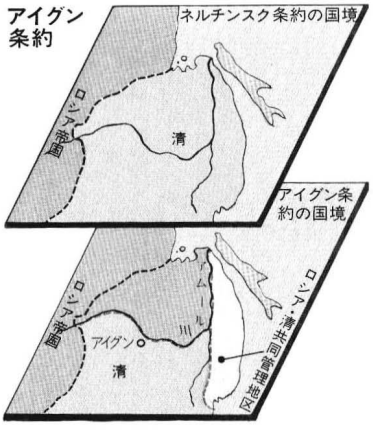
アイグン条約　――じょうやく　一八五八年に清とロシアが中国黒竜江省北部のアイグン（愛琿 Aĭrynн／Aygun 現、愛輝）で結んだ条約。ロシアはクリミア戦争を機とし、清領の黒竜江（アムール川）を航行し、沿岸に植民していたが、アロー戦争が起こると、黒竜江を自領とするために、ネルチンスク条約の未決定境界の条項を利用し、清側に圧力を加え、現地交渉で三か条からなるこの条約を結んだ。代表は東シベリア総督ムラビヨフと、清の黒竜江将軍奕山。条約の要点は次のとおりである。

(1)黒竜江左岸はロシア領、黒竜江右岸は、烏蘇里江（ウスリー川）以西を清領、同江以東、海までの地を両国の共同管理とする。

(2)黒竜江左岸の満州人集落は清国が管轄する。

(3)黒竜、松花（スンガリ）、烏蘇里の三江を航行してよいのは両国の船に限る。

(4)この三江の沿岸住民はお互いに貿易をしてもよい。



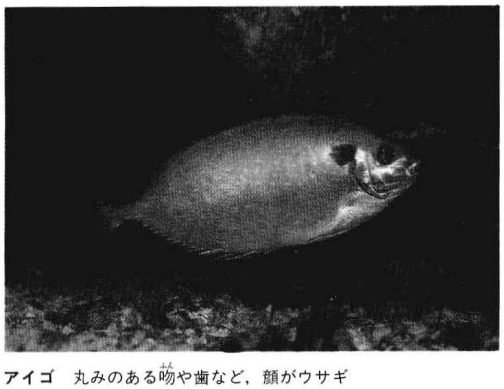
清朝政府は、いったんは本条約を承認したが、のちにこれを否認した。しかし、一八六〇年の北京条約で本条約の約定条項が確認され、共同管理地はロシア領となった。→ネルチンスク条約　〈吉田金一〉

▽吉田金一著『近代露清関係史』（一九七四・近藤出版社）

アイケルバーガー　Robert Lawrence Eichelberger（一八八六―一九六二）　アメリカの軍人。一九〇九年陸軍士官学校（ウェストポイント）卒業後、おもにアジア・太平洋方面担当の情報、幕僚職を歴任し、四〇年陸軍士官学校長。日米開戦後はマッカーサー麾下の第一軍団長として太平洋方面を転戦、四四年から第八軍司令官（中将）となりフィリピン攻略に活躍。終戦後は日本占領に参画、日本再軍備を主張。離日後も講和問題で国防総省のアメリカ軍駐留継続論を日本側に伝えたりした。〈遠藤雅巳〉

アイゲン　Manfred Eigen（一九二七―　）　ドイツの物理化学者。音楽家の息子としてボーフムに生まれる。ゲッティンゲン大学に学び、一九五一年博士号を得た。同大学で助手を務め、五三年にマックス・プランク研究所物理化学部門の助手、六四年以降同部門の部長となる。六七年、化学反応論の業績によりポーター George Porter（一九二〇―　）、ノリッシュ Ronald George Waeyferd Norrish（一八九七―一九七八）とともにノーベル化学賞を受賞した。一九五四年以降、化学反応におけるいわゆる緩和法を開発し、一〇〇万分の一秒以下の高速度反応の機構を解明した。緩和法とは、平衡状態にある溶液の条件（温度、圧力、電場など）を変化させ、その際の状態をスペクトル分析などにより解析する方法をいう。のちにこの方法を生化学反応にも適用し、核酸、タンパク質などの形成機構を説明している。〈高山　進〉

アイゴ　〔藍子〕　rabbitfish／㊥*Siganus fuscescens*　硬骨魚綱スズキ目アイゴ科に属する海水魚。アイ、アエなどの地方名がある。中部日本から西部太平洋、インド洋の浅海に分布する。体は長卵形で側扁し、淡褐色の地に白点が散在する。腹びれの前後両端にそれぞれ一棘、臀びれに七棘あることが特徴で、スズキ目の他種と容易に区別される。鱗は小さな円鱗で、無鱗の感じを与える。岩礁域で群泳し、海藻を好んで食べ、ときには底部の小動物も食べる。体長は五〇センチに達し、アイゴ類ではもっとも大きく、釣りの対象ともなる。夏季に粘着性の卵を産む。近縁種にはヒフキアイゴなど十数種いるが、いずれも熱帯の浅海に多い。各ひれのとげは矢羽状で、くぼんだ部分には毒液を分泌する細胞が多数並び、これに刺されると細胞が破れて、毒液が注入され、激痛を与えるので、取扱いには注意が必要である。肉は磯臭さがあり、食用魚としての価値は高くないが、冬季にはその臭さが少なくなり、塩焼きや煮つけにするとおいしい。〈井田　齊〉



アイゴ　丸みのある吻や歯など，顔がウサギを思わすので英名はラビットフィッシュ。とげには強い毒がある

愛語　あいご　仏教用語。菩薩が人々を救うにあたって、人々を誘い仏道に導いていくための四つの方法（四摂法）のうちの一つ。優しいことば、親しみのある心のこもったことば、人々に対する慈悲心（慈しみの心）から発せられたことば、親愛の心をおこさせることばをいう。〈伊藤秀憲〉

哀公　あいこう　（？―前四六八）　中国、春秋時代の魯の王（在位前四九四～前四六八）。姓は姫、名は将（蔣）。定公の子。当時、国内では三桓氏とよばれる公族の力が強く、対外的にも呉や斉の攻撃を受けて魯の国勢は振るわず、衛より帰国した孔子も紀元前四七九年に不遇のうちに没した。のち、哀公は越の力を借りて三桓氏を除こうとしたが、かえって三桓氏の攻撃を受け、在位二七年にして魯の有山氏のもとで死去した。〈安倍道子〉

哀号　あいごう　中国の習俗で、人の死を悲しみ声をあげて泣くこと。形式化されて葬儀儀

礼となり、死者との血縁関係の親疎により、泣き方、回数、場所などが異なり、雇われ泣き女や泣き男、哭人（男）または哭婢（女）を加えて号泣させることもあった。

朝鮮でも同じように葬礼のとき、葬主や近親が棺のそばで「アイゴウ」と叫んで悲しみ泣く習俗がある。朝鮮語の「アイゴウ」は、たいへん痛い、悲しい、力がいる、驚く、痛恨に耐えない、あるいは追い詰められたときに発する感嘆詞である。〈宮原兎一〉

愛国啓蒙運動　あいこくけいもううんどう　李氏朝鮮末期（一八九七年、国号を大韓帝国と改称）の救国運動。日露戦争終結後の一九〇五年一一月、日本はロシア、アメリカ、イギリスの承認のもとに朝鮮に「保護条約」を強要して以後、ソウルに置いた統監府を通じて支配を強化していった。これに対して朝鮮の愛国志士たちはさまざまな抗日救国運動を展開した。そのおもなものがゲリラ的な義兵運動と、合法的な愛国啓蒙運動である。後者は、尹孝定、張志淵、朴殷植ら言論界や教育界の知識人たちが、国権の回復には愛国心の涵養と教育、産業の振興による実力の培養が必要であるとして、全国の津々浦々に私立学校を設立するとともに、大韓自強会、西北学会、女子教育会などの団体を結成して国民の愛国心と教育熱の高揚に努めた運動である。統監府と傀儡化した政府は学会令、私立学校令などでこの運動に対する規制を強め、さらに一九一〇年八月の朝鮮併合と同時にこれらの団体を禁止したため、この運動は挫折した。〈田口容三〉

[参]姜在彦著『朝鮮の開化思想』（一九八〇・岩波書店）▽朴殷植著、姜徳相訳注『朝鮮独立運動の血史1・2』（平凡社・東洋文庫）

愛国交親社　あいこくこうしんしゃ　明治前期の地方民権政社。一八七九年（明治一二）三月、内藤魯一らによって設立された「（三河）交親社」は、名古屋方面にも組織を拡大して、八〇年三月「愛知県交親社」と称し、愛国社第四回大会に臨んだ。やがて「愛知県交親社」のなかから「尾張組」が独立して、荒川定英、庄林一正らによって「愛国交親社」が成立した。草莽隊出身者、興行撃剣のメンバーを中核とした「愛国交親社」は、八二～八三年には、愛知、岐阜県を中心に広範囲にわたって貧農や都市細民を組織し、社員約二万八〇〇〇人を数えた。「国権挽回」を強調する「愛国交親社」と、別に再編成された内藤魯一らの「民権拡張」を主義とする「愛知自由党」とは一線を画し、愛知県中島郡朝宮村での愛国交親社員による自由党員傷害事件をきっかけに、愛国交親社に対する弾圧が強化され、八四年七月、治安を妨害するものとして、ついに解散を命ぜられた。〈日比野元彦〉

愛国公党　あいこくこうとう　(1)一八七四年（明治七）一月一二日結成された自由民権政治結社。征韓論に敗れて下野した前参議の板垣退助、後藤象二郎、副島種臣、江藤新平らが中心になって結成し、民撰議院設立建白書を左院に提出、士族および豪農商の代表者からなる議会を設立せよと主張した。しかし、江藤が佐賀の乱（一八七四）に加担したため、この結社は崩壊した。

(2)一八九〇年（明治二三）五月、板垣退助らが組織した政党。大同団結運動は、後藤象二郎が黒田清隆内閣に入閣したのを契機に分裂した。板垣は分裂を阻止しようとしたが果たさず、八九年一二月に愛国公党の結成を決意し、翌年五月五日創立大会を開いた。板垣は大同協和会および大同倶楽部との合同を望み、五月一五日に三派は庚寅倶楽部を組織し、愛国公党は八月に解党した。第一回総選挙後に立憲自由党となる。〈後藤　靖〉

[参]板垣退助編『自由党史』（岩波文庫）▽後藤靖著『天皇制形成期の民衆闘争』（一九八〇・青木書店）

愛国社　あいこくしゃ　日本最初の全国的政治結社。一八七五年（明治八）二月二二日、土佐立志社が中心となって各地方の自由民権結社を結集して結成された。創立大会には数十名の士族が集まったにすぎなかったが、東京に本社を置き、毎年二月と八月に大会を開くことを決め、民権運動の発展に努めようとしたが、すぐに解体した。その後七八年に植木枝盛らの主唱によって再興され、七九年には一八県二一社が参集する全国的結社となった。これを契機として自由民権運動は急速に発展し、八〇年三月の第四回大会には二府二七県の国会開設請願署名者一〇万一一六一名の代表九七名が大阪に結集し、名を国会期成同盟と改め、土佐立志社の片岡健吉、福島石陽社の河野広中を代表に選んで政府に「国会を開設するの允可を上願する書」を提出した。〈後藤　靖〉

[参]板垣退助編『自由党史』（岩波文庫）▽内藤正中著『自由民権運動の研究』（一九六五・青木書店）▽後藤靖著『自由民権』（中公新書）

愛国志林　あいこくしりん　愛国社の機関誌。一八八〇年（明治一三）三月に発刊され、同年八月『愛国新誌』と改題。植木枝盛、永田一二、坂本南海男ら自由民権運動の理論的指導者らが中心となり、民権思想の普及と同志を結集する目的で発刊。四六判二二ページを定型とする週刊誌であったが、八一年一月の二〇号からは月三回発行、同年八月廃刊し『高知新聞』に吸収された。〈後藤　靖〉

[参]『明治文化全集第一四巻　自由民権篇（続）』（一九五六・日本評論社）

愛国心　あいこくしん　patriotism　ある一つの国家に属する国民が、その国家に愛着心をもち、国家の運命を自分の運命と同一視し、国家に一身を捧げてもよいと考えるような感情をさす。こうした感情は、人間が集団生活をしているところでは自然に発生しやすいともいえる。アメリカの社会学者W・G・サムナーは、それをエスノセントリズム ethnocentrism と名づけた。すなわち、外集団に対する敵対感と裏腹に存在している、内集団に対する連帯感や理想化である。しかし、現在問題となっている愛国心は、近代国民国家形成以後のそれであって、未開社会のエスノセントリズムや、古代ギリシアのポリス（都市国家）やローマや古代中国などの専制的帝国などにみられる「愛国心」とは区別して考えるべきである。

〔近代の愛国心〕ヨーロッパにおいて、封建制社会の枠組みが崩れ、中央集権的な絶対主義国家が生まれてくる。それは、経済的には商品流通の広がりとしての国民的市場圏の成立と密接な関係がある。こうして、イギリス、オランダ、フランスなどにおいて新しい近代国家の誕生がみられる。しかし、この段階では、国民の忠誠の対象は国家ではなく、むしろ国王であった。

やがて、都市の市民階級の力がさらに強くなって、王侯、貴族、僧侶などの権力からの解放が求められる。そして、フランス大革命（一七八九）でみられるように、自由、平等、博愛の市民的、民主的価値の実現のために、新しい国家権力の形成が問題となる。この段階で、典型的な意味での近代国民国家が成立する。そして、市民にはこの国家の支持と防衛の義務が課せられ、そのなかで近代的な愛国心が生まれた。そこでは、愛国と市民的自由とが結び付いていた。つまり、ナショナリズムとデモクラシーとは一体のものとされた。

こうした愛国心は、たとえば江戸幕藩体制における藩主への忠誠心などとはかなり違ったものである。そのことを自覚して、明治時代の学者西村茂樹は『尊王愛国論』（一八九二）のなかで、「現今本邦にて用ひる愛国の義は支那より出たるに非ずして、西洋諸国に言ふ所のパトリオチズムを訳したるものなり……本邦及び支那の古典を閲するに、西人の称するが如き愛国の義なく……」と書いている。この指摘は歴史的に正確であるといえよう。

一八世紀のヨーロッパでは、フランスやオランダの進歩派や共和派は自らを愛国者と名のり、イタリアの統一独立国家を求める運動に参加する者たちも愛国者であることを誇りとした。こうした思想的系譜は、日本でも自由民権論者が愛国公党とか愛国社を創設したところにみられる。

〔帝国主義国家における愛国心〕しかし、近代国民国家の愛国心は、同時に植民地獲得競争のなかで、比較的、民主主義の発達したイギリス、アメリカ、フランスなどにおいても、侵略主義を肯定する愛国心に変質した。まして前近代的要素が濃厚に残っていたドイツ、ロシア、日本などでは、君主への忠誠と国家への献身が癒着する。日本では、「愛国」は自由民権論者から国権論者の手に渡った。明治の絶対主義国家のなかでは、「忠君愛国」が国民の教化の中核に据えられる。こうして愛国心は市民的自由と切り離された。その考えは一八九〇年（明治二三）に発布された教育勅語で完成された。光と影を伴っていた愛国心の影の部分がむしろ大きくなり、まさに「無頼漢の最後の逃げ場所」と指摘されるようなものとなった。

その側面は第二次世界大戦を経た現在でさえ強く残っている。たとえば、一九八二年のフォークランド諸島（マルビナス諸島）をめぐるイギリスとアルゼンチンの戦いは、一九世紀的「愛国心」がいまも存在していることを示した。愛国心はどこの国でも「国を守る気概」というように、国家の軍事的「防衛」と結び付けられていることが多い。日本における戦後の「愛国心」論争はその例証である。

〔植民地解放闘争における愛国心〕しかし他方、長い間植民地圧制に苦しんできた被圧迫民

衆のなかからは、国家の独立を求める愛国心が生まれる。毛沢東は「民族は解放を求め、国家は独立を求め、人民は革命を求める」といったが、こうした文脈のなかでの愛国心は、現在第三世界の解放運動のなかに存在している。ただし、第二次大戦後多くの社会主義国家が生まれたが、その間でも国家の利害の衝突が生まれた。このことでも理解できるとおり、ナショナリズムとインターナショナリズムとの統一は、依然としてまだ解決されていない課題である。

一般的に、愛国心を国家がとくに奨励することは、むしろ有害な時代に入っている。ましてや軍事的緊張のもとでつくられる愛国心は、人類の平和にとっての対立物となっているといえよう。〈日高六郎〉

Ⅲ青柳清孝・園田恭一・山本英治訳『現代社会学大系3　サムナー　フォークウェイズ』（一九七五・青木書店）▽丸山真男著『増補版現代政治の思想と行動』（一九六四・未来社）▽E・H・カー著、大窪愿二訳『ナショナリズムの発展』（一九三一・みすず書房）

愛国婦人会　あいこくふじんかい　戦前の軍事後援を目的とする婦人団体。一九〇一年（明治三四）二月二四日奥村五百子により設立された（発会式は三月二日）。動機は、奥村が前年義和団事件（北清事変）の戦地を視察したとき、兵士に後顧の憂いをもたせてはいけないと感得したことにある。当初、戦死者の遺族と重傷痍軍人の救護を目的とし、婦人が半衿一掛を節約して会費を出し合い、それを弔慰金として寄贈することを主事業とした。皇族や名流華族夫人を総裁、会長にいただき、東京に本部を、道府県に支部を置き、〇二年機関誌『愛国婦人』を発行、日露戦時の〇五年には四六万余の会員を数えた。第一次世界大戦後には、児童健康相談、婦人職業紹介などの社会事業にも着手。満州事変勃発（一九三一）後、軍部のつくった大日本国防婦人会に対抗して婦人報国運動を興し、地久節（皇后誕生日）奉仕や愛国貯金運動を行った。一九四二年（昭和一七）二月二日大日本婦人会に統合された（統合時の会員は約四〇〇万人）。→大日本婦人会　〈阿部恒久〉

Ⅲ飛鋪秀一著『愛国婦人会四十年史』（一九八一・愛国婦人会）

アイゴス計画　――けいかく　全世界海洋情報サービス計画 Integrated Global Ocean Service System の略。海洋観測の結果を無電で最寄りの気象機関（日本では気象庁）へ送り、さらに気象資料交換用の国際通信回線を利用して、国際的に利用しあっていこうという計画。海洋は広大で、一機関ではもちろん、一国の力だけでは観測調査しきれない。海洋の情報は、水産や航海上ばかりでなく、異常気象の予測には欠かせないものなので、国連の専門機関である世界気象機関とユネスコが協力しあって、一九七二年以来その推進に努力している。だが、産業上の利益と関係があるため、観測資料の公開ははかばかしくない。日本は、アメリカ、ソ連に次ぐ貢献をしている。〈安井　正〉

アイゴスポタモイの戦い　――のたたかい　ペロポネソス戦争（前四三一～前四〇四）中、紀元前四〇五年の秋に起こったリサンドロスの率いるスパルタ軍とアテネ軍との戦い。アイゴスポタモイ Aigospotamoi とは「山羊川」の意味で、トラキアのケルソネソス（ダーダネルス海峡の西側の半島）東側にある川および町の名。この戦いでリサンドロスは敵軍のほぼ全艦隊を手中に収めるのに成功し、ペロポネソス戦争を事実上終結させた。敗れたアテネは制海権を失って黒海方面からの穀物供給を断たれ、翌春、アテネ市もリサンドロスに占領された。→ペロポネソス戦争　〈真下英信〉

合いことば　あいことば　戦場における混乱、とくに夜戦のそれを防ぐために、敵味方を識別する目的で用いられることば。英語では countersign, pass word といい、フランス語では mot d'ordre, mot de passe という。暗号ともいう。ある特定の意味をもったことばや、発音に際だった特徴のあることばが用いられる。『日本書紀』「天武天皇　上」の巻に、大友皇子方の武将田辺小隅が敵の大海人皇子方の武将田中足麻呂と夜戦を交えた際、「金」の合いことばを用い、足麻呂方の軍卒と自軍のそれとを識別させたが、足麻呂は早くこのことに気づき、ただ一人難を免れた、との記載があり、これが日本における合いことばの初例と思われる。江戸時代に、赤穂義士が主君の仇吉良上野介の邸に討ち入った際、「山」と「川」の合いことばを用いたと伝えられるが、浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』では、浪士の討入り装束を調えた商人天川屋義平の屋号をとって、「天」と「川」となっている。

外国では『旧約聖書』「士師記」第一二章に、エフライム人を破ったガラアド人が、逃げて行くエフライム人を捕らえ、「シボレテ」Shibboleth（ヘブライ語で「麦角」）といわせ、「セボレテ」としか発音できないエフライム人を識別した、との記載がある。これに類したものに第二次世界大戦中の一九四二年一月、日本軍に追われて大混乱のバターン半島（フィリピン）撤退作戦中のアメリカ軍が、lollapaloosa（米語「驚くべきできごと」）を合いことばとし、日本人がこれを rorraparoosa としか発音できないことによって、味方を識別した例がある。

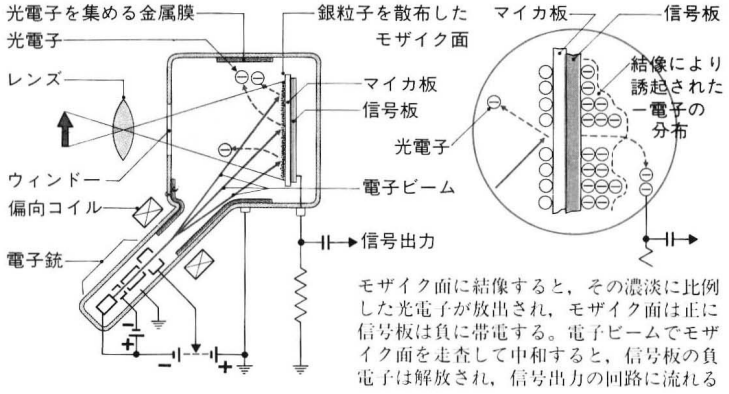
なお、特定の社会や集団だけの間で通用する、特殊な意味をもったことば（隠語）や、ある主張や行動の旗印として使われることば（標語）も、合いことばの語でよばれる例も多い。→暗号　→隠語　〈宇田敏彦〉

アイコノスコープ　iconoscope　テレビジョン撮像管の一種で、一九三三年アメリカのツウォリキンの発明したもの。この発明以前はファンスワース管といわれる解像管などが用いられていたが、感度が低いため実用的でなかった。アイコノスコープの出現により、精細な画像が初めて可能になった。

構造は図のようになっており、モザイク面は、厚さ三〇～四〇ミクロンの薄いマイカ（雲母）板の片面に、直径一～二ミクロンの光電効果をもった銀の粒子を散布して光電素子としたものである。マイカ板の他の面には金属が蒸着してあり、信号板とよばれる。被写体の像をモザイク面上に結ぶと、像の明暗、つまり光の強弱に応じた光電子を放出し、その部分は電気的に正になり、信号板には静電誘導で負の電荷が残る。モザイク面に電子銃から出た電子ビームを当てると、ビームの負電荷によってモザイク面上の正電荷が中和され、信号板上の負電荷は解放されて外部回路に放電電流が流れる。したがって、適当な偏向装置により電子ビームをモザイク面上に走査（画面を一定の順序に従って電気信号に変える）してやると、二次元画像から時間の経過に伴って変化するテレビジョンの映像信号が得られる。

アイコノスコープは歴史的に重要で、今日のテレビジョン発展の素地をつくったが、その後、高感度の撮像管が次々に開発され、現在は使用されていない。→撮像管　〈金木利之〉

アイコノスコープ／原理

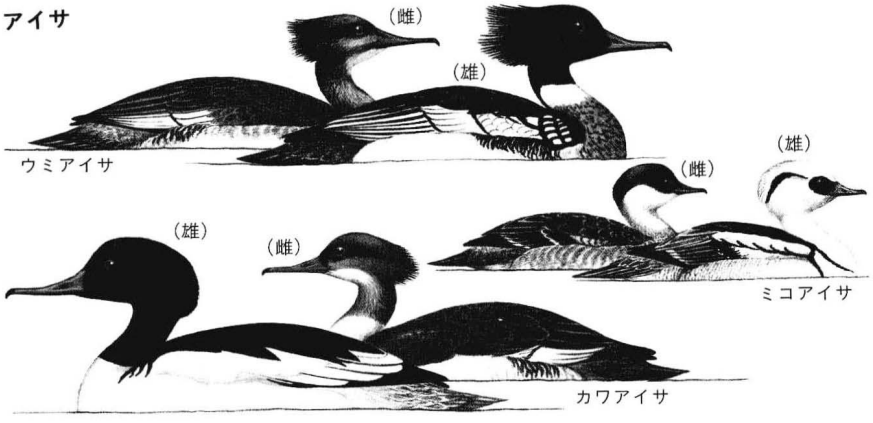


モザイク面に結像すると，その濃淡に比例した光電子が放出され，モザイク面は正に信号板は負に帯電する。電子ビームでモザイク面を走査して中和すると，信号板の電子は解放され，信号出力の回路に流れる

愛護若　あいごのわか　説経浄瑠璃の曲名。成立年は不明であるが、一六六一年（万治四）正月刊行の版本が残されている。『今昔物語』巻四にある「狗筝羅太子眼を抉り法力に依りて眼を得たる語」により、日吉山王権現の本地物として仕組んだもの。王朝時代に、二条蔵人清平夫妻が初瀬観音に祈願して授かった愛護若は、成長して継母の雲井前に恋慕されたが、それを拒絶したため、その報復として二条家伝来の宝物盗難の犯人の汚名をきせられ、そのうえ、さまざまな計略で苦しめられる。愛護若は、絶望と悲憤の果てに父への遺書を小袖の袂に入れて木の枝にかけ、比叡山東麓の霧生の滝に身を投げて死ぬ。その後、愛護若は疑いが晴れて山王権現として祀られるという内容。『かるかや』『さんせう太夫』などとともに五説経の一つとして親しまれ、後の浄瑠璃、歌舞伎、音曲に強い影響を与えた。改作物として竹本義太夫の正本『都の冨士』、武蔵権大夫の正本『日吉山王』の本地、紀海音の『愛護若堀箱』、近松半二らの『愛護若名歌勝関』などが現れ、とくに菅専助らの『摂州合邦辻』の構想には、説経浄瑠璃『愛護若』の大きな影響がみられて興味深い。　〈関山和夫〉

Ⅲ『愛護若』（荒木繁・山本吉左右編注『説経節』一九七三・平凡社・所収）

アイサ



アイサ 〔秋沙〕 merganser　鳥綱カモ目カモ科アイサ属に含まれる鳥の総称。この属 *Mergus* はもっとも潜水性の発達した魚食のウミガモ類で、体はやや長くウの体形に類似し、嘴が細く鋸状の歯状突起（歯板）がある。北半球に五種、南アメリカに一種クロアイサ *M. octocetaceus* があり、ニュージーランドにいた一種シマアイサ *M. australis* は一九〇五年に絶滅した。

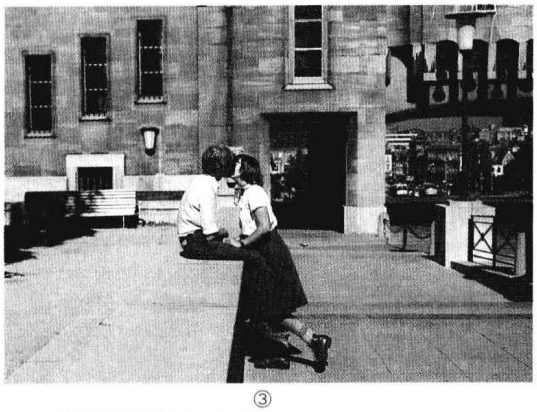
日本には三種が知られる。カワアイサ *M. merganser* は全長約六五センチ、北半球に広く分布し、おもに湖に冬季渡来し、阿寒湖では繁殖例がある。雄の頭部は緑黒色で、後頭部が大きいが羽冠にはならない。下面は白色で脂肪性のピンク色を帯び、背は黒く肩羽の内側は白い。雌は頭部が褐色で、後頭部は羽冠をなす。体は灰褐色で、嘴と足は赤い。ウミアイサ *M. serrator* も北半球に広く繁殖し、日本の江湾にも越冬群がみられる。全長約五五センチ。雄は一見カワアイサに似ているが、後頭部は羽冠をなし、胸に褐色帯がある。雌は前種と区別困難であるが、嘴の羽毛の生え際の形で判別できる。ミコアイサ *M. albellus* はユーラシア産で、冬鳥として浅い湾や川に渡来する。全長約四二センチと、もっとも小形で、雄は白色で胸側などに黒線があり、雌の頭部は褐色、体は灰褐色である。北海道では繁殖例が知られる。そのほか北半球の外国産には次の二種がある。オウギアイサ *M. cucullatus* は北アメリカ産の小形種で、雄は後頭部に白地に黒で縁どられた扇状の大羽冠が広がるもっとも美しい種である。コウライアイサ *M. squamatus* はウミアイサに似るが、体のわきに大きい網斑があり、雄に褐色の胸帯はない。ソ連の沿海州ウスリー地方、中国東北地区に特産の希種とされる。〈黒田長久〉

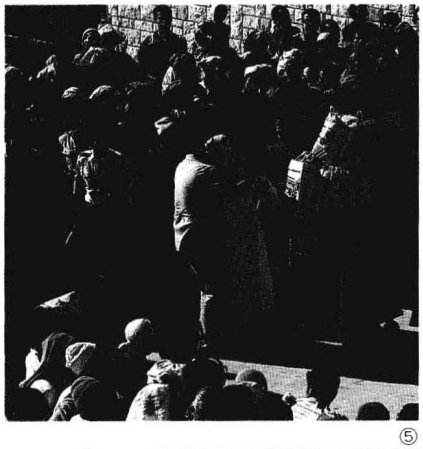
挨拶 あいさつ　日常の人間関係を円滑に取り運ぶための、一定の形式をもった、なかば儀礼的な相互行為。一方、人間関係を疎遠にするために交わすこともある。

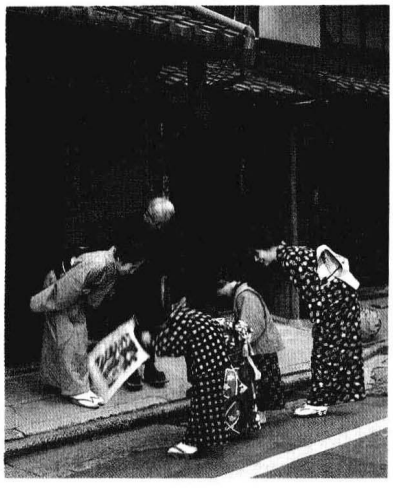
挨拶の方法は、互いに声をかけあったり、または特定の顔の表情や身ぶり手ぶりで示すなどさまざまであり、これらのことばや動作は、それぞれの社会において幼いころからしつけられる。また挨拶には、社会的空間において互いの関係を位置づけまたは確認するという目的も含まれているため、性、年齢、地位、身分、宗教、親族関係の有無あるいは差違、生活集団の内にあるか外にあるかなどの諸条件に応じて挨拶の仕方も違ってくる。

たとえば、サウジアラビアの砂漠に住むベドウィンのある部族は、他部族のテントを訪れたとき、彼らのうちの男たちとだけ握手を交わす。訪問先が同一部族であって、相手が三〇歳くらいまでの同じリニエッジ（単系出自集団の一つ）であれば、軽い口づけを挨拶とする。中年以上、または別のリニエッジの者に対しては、相手の鼻に二、三回指を触れる。また相手が老人の場合は、リニエッジが異なれば単に指を鼻に触れるだけだが、リニエッジが同じなら鼻に接吻をする。一方、女たちに対しては、リニエッジが異なり姻戚でもなければ、テント内の仕切り越しにことばをかけるだけである。しかし同リニエッジの場合は、女の区画へ入って

挨拶







身体を接触させる挨拶は世界中でみることができる　①欧米人の接吻　②身体を抱き合う挨拶は強い感情を表す場合が多い（エジプト，カイロ空港）　③握手　④マオリ族（ニュージーランド）の鼻を触れ合う挨拶　⑤目上の人に対する挨拶（フィリピン）　⑥日本での挨拶は頭を下げることが基本的な様式となっている　⑦また，歌舞伎役者の「披露口上」のように様式化された挨拶も残されている

行き、リニエッジの差異により握手あるいはベールを上げて頬に接吻をする。

このほか、変わった挨拶として、マサイ族など東アフリカの牛牧民は地面に槍を逆さまにして突き刺すし、ニューギニア高地のモニ族などは「アマカネ」といいながら指切りのようなことをして互いに引っ張って離し、パチンと音をたてることで親しみを表現する。またエスキモー族による満面笑みをたたえた特別の応対ぶりなど、個々の事例は旅行記や民族誌で多く紹介されている。

しかし、諸民族とりわけ非西欧的社会における挨拶については、風変わりな部分だけが取り上げられ、ことさら話題にされる傾向が強い。だが、日本人が腰を折り身をかがめておじぎをし、欧米人が抱擁し接吻するのも、みる立場によっては、それぞれ変わった挨拶として受け止められよう。挨拶を考える場合、その背景にある社会的状況と文化的前提とを対比、関連させながら掘り下げる必要があろう。〈小川正恭〉

〔日本人の挨拶方式〕 日本人の挨拶も対面交渉の前後に行われる応対方式であって、通例伝統的に形式化した「ことば遣い」に特定の「身ぶり」を伴う。挨拶の「挨」は押す、「拶」は押し返すの意で、本来は禅僧の「知識考案」における「受け答え」をさす語で、それが一般にも通用するに至ったもの。国語では古くから「物言い」あるいは「ことばをかける」「声をかける」などと言い習わし、狂言において応対文句に「何と」「物と」とあるのも同趣である。こうした応対方式は有職故実の「礼式」などに定型化されて伝存するが、むしろ民間一般の習俗が重視されるべきで、地方性と職業に従ってその様式は多様を極め、また時代による変遷も顕著である。

挨拶の方式は「仲間内」と「仲間外」の別があり、また日常時（ケ）と特定の改まった場合（ハレ）とでは大きな違いが生ずる。日常の挨拶ことばは、天候や仕事の進度など共通の関心にかかわる「形式的用語」であり、季節や時刻で異なる。早朝のオハヨウは一般的であるが、このほかオヒンナリ、タダイマというような地方的用例もいろいろある。日中のコンニチハにも、オセンドサン、ゴショウダシなど、相手の働きぶりを褒める意味の挨拶ことばを用いる地方もある。また、オアガリ、ノマンシタカなど休息、食事にかかわるものや、オツカレ、オバンデ、オシマイナなど夕刻の挨拶には労働のねぎらいを示すことばが多い。夜のオヤスミも同義で、オイザト、ダッチョ、ザットヤーなどの方言には「目ざとくあれ」という古意が残っている。

他家訪問や初対面の応対にも定型の用語があり、これらもまた地方的、職業的に特殊化した例が少なくない。ウチナ、イラシンスケなど家人の在否を尋ねる形から、オユルシナ、ゴヨウシャなど、今日のゴメンクダサイと同意の語が多く用いられ、さらに形式化してハイット、ヨイト、オイロンといった簡略語も生まれた。「物申う」も簡略語の旧形で、現在は電話応対のモシモシに名残をとどめている。サヨナラ、ソンナラという「別れことば」も多岐にわたり、マタナ、オミョウニチ、コンドメヤ、ソンデハマタなど再会を約す意味のものが多い。仲間内の日常挨拶ことばは簡略化が進み、まったくの符丁と化したものも珍しくはないが、それでも仲間関係の確認には足りるのである。

正月礼、盆礼、節供礼や吉凶の訪問には、改まった慣習的挨拶ことばがあり、所によっては「口上書」を伴う古形式さえ残っている。また、「仲間入り」の挨拶は職業によって違うが、おおむね重々しく、いわゆる「披露」の挨拶ともなると多分に様式化されるのを常とした。歌舞伎役者の「披露口上」などはその典型であり、また「やくざ仲間」の「披露」もものしく、別に仲間外挨拶として「仁義をきる」という作法様式も生じた。

一般に挨拶には呪術的祝福の意を伴うことが多いとされているが、日本の場合はそれが希薄で、わずかにトウデヤ、アリガトウなどの「礼ことば」に神仏をたたえる意が若干残る程度である。

挨拶の「身ぶり」は多様で、日常の場合は簡略化されたものの、特定の席ではさまざまに様式化した。『魏志倭人伝』によれば、下戸が大人に会うと退いてうずくまり、両手をついてかしこまり、「噫」と返答するとか、あるいは公の場にあって大人の礼拝に両手を打って応ずる、とある。これは古形を伝えるものだが、少なくとも日本においては「頭を下げる」ことが伝統的様式であり、立礼と座礼ではその様式も異なる。とくに「ハレ」の席の座礼にあっては、扇の使用によってさまざまの形を生み出すことにもなった。〈竹内利美〉

アイザメ 〔相鮫・藍鮫〕 ㊥*Centrophorus atromarginatus* 軟骨魚綱サメ目ツノザメ科に属する海水魚。東京湾以南の深海、とくに相模湾や高知沖などから知られている。背びれに溝のある強いとげがあること、臀びれがないこと、上顎歯が単一形であること、胸びれの内角が伸長することなどが特徴である。アイザメ属のサメは世界に一〇種内外が知られ、このうち日本近海に分布する種は、本種のほかにタロウザメ *C. acus*、オキナワヤジリザメ *C. scalpratus*、モミジザメ *C. squamosus*、ゲンロクザメ *C. tessellatus* の四種がある。このなかで前二者はインド洋や大西洋にも広く分布するが、モミジザメ、ゲンロクザメは日本近海でのみ知られている。これらのアイザメ類は全長ほぼ一メートルに達し、卵胎生である。いずれも深海性で、延縄などで漁獲され、肉は練り製品の原料となり、肝臓も珍味とされる。さらに肝臓からは耐寒性潤滑油に使われるスクアレンがとれるので、産業的に重要な種となっている。海外からもアイザメ類などの深海性ツノザメ類の肝油が輸入されている。〈仲谷一宏〉

相去 あいさり 岩手県中南部、北上平野の中央部、北上市の一地区。旧相去村。藩政時代、奥羽街道に沿う街村で、伊達領の北端に位置し、南部領の鬼柳に接した。一六四二年（寛永一九）に伊達藩（仙台藩）は相去に境塚を築き、屯田足軽を配置し藩境防備集落をつくった。これが現在の三十人町であり、藩境塚の一部も残っている。〈川本忠平〉

㊞五万分の一地形図「北上」

相沢事件 あいざわじけん 一九三五年（昭和一〇）八月一二日、陸軍中佐相沢三郎が陸軍省で執務中の軍務局長永田鉄山少将を斬殺した事件。二・二六事件の伏線となったもので永田事件ともいう。相沢はかねてから村中孝次、磯部浅一ら皇道派青年将校と親交があり、彼らの思想に共鳴していた。三四年の一一月事件（士官学校事件）をきっかけとして統制派と皇道派の抗争が表面化し、翌三五年七月皇道派が首領と仰ぐ真崎甚三郎教育総監更迭問題が起こるや、相沢は、永田が「重臣、財閥、政党の手先となり皇軍を私兵化」している統制派の元凶であると考え、永田殺害を決意するに至った。相沢公判は三六年一月二八日第一師団軍法会議で開始され、皇道派はこの公判を統制派批判に利用するため法廷闘争を展開するが、これが行き詰まると二・二六事件決起計画に転じる。相沢は五月七日死刑を宣告され、翌日第一師団高等軍法会議に上告したが棄却され、六月三〇日判決が確定、七月三日死刑が執行された。→二・二六事件〈安部博純〉

相沢事件 相沢三郎中佐により執務中に斬殺された永田鉄山少将（陸軍省軍務局長室）

㊞菅原裕著『相沢中佐事件の真相』（一九七一・経済往来社）▽松本清張著『昭和史発掘7、8』（一九六八、六九・文芸春秋）▽林茂他編『二・二六事件秘録1』（一九七一・小学館）

会沢正志斎 あいざわせいしさい（一七八二―一八六三）江戸末期の儒学者で水戸学の代表的思想家。名は安、字は伯民、通称恒蔵、号は正志斎、憩斎。天明二年五月二五日常陸国久慈郡諸沢村（茨城県那珂郡山方町）に生まれる。一〇歳で藤田幽谷に学び、彰考館写字生となる。一八〇七年（文化四）、当時五歳であった後の藩主徳川斉昭の侍読を務め、二四年（文政七）イギリス人常陸大津浜上陸事件の尋問にあたり、翌年尊王攘夷運動の聖典といわれる『新論』を著述した。幽谷の没後、彰考館総裁代理となる。藩主斉脩の相続問題が起こると斉昭擁立に奔走。二九年斉昭就任後、郡奉行、通事、調役、彰考館総裁を歴任、四〇年（天保一一）弘道館教授頭取となる。ペリー来航に際し和議の非を説いたが、五八年（安政五）修好通商条約調印後、井伊大老の非をつく戊午の密勅が水戸藩に下るや、幕命を体して勅書の伝達を中止し、これを幕府に返納すべきことを主張した。桜田・坂下両門外の変に際しては御三家家臣の身分秩序を超える反逆の行為と論断、ついで六二年（文久二）一橋慶喜に「時務策」を呈し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com